

ISSN 0918-4546

# ILSI

# イリシー

Life Science & Quality of Life

No. 32

1992



日本国際生命科学協会

INTERNATIONAL LIFE SCIENCES INSTITUTE OF JAPAN

日本国際生命科学協会（International Life Sciences Institute of Japan, ILSI JAPAN）は、健康、栄養および食品関連の安全性に関する諸問題を解決するため、政府機関、学術機関および産業界の国際的な協力体制のもとで、科学的な観点から調査研究を推進するために設立された非営利の科学団体である国際生命科学協会（International Life Sciences Institute; ILSI）の一部門として日本を中心に活動している非営利の科学団体です。

目 次

実験動物に関するILSI病理組織スライドセミナーと国際シンポジウム —現況と将来への展望—	小 西 陽 一	1
ILSIの国際的活動とILSI JAPANの科学研究活動に期待されるもの	粟飯原 景 昭	6
バイオ食品の安全性に関する最近の動向	倉 沢 璋 伍	23
委員会活動報告		29
広報委員会	秋 山 孝	
編集委員会	青 木 真一郎	
科学研究企画委員会		
栄養とエイジング研究委員会	大 田 賛 行	
安全性研究委員会	大 下 克 典	
油脂の栄養研究委員会	日 野 哲 雄	
RF設立準備室	福 富 文 武	
「栄養学レビュー」誌編集委員会	福 富 文 武	
NGOとしてのILSIの国際的な貢献	日本国際生命科学協会 編集委員会	43
会員の異動		51
活動日誌		52
ILSI/ILSI JAPAN 出版物		53
会員名簿		59

## CONTENTS

International Symposium and ILSI Histopathology Seminars in Laboratory Animals -----	1
- Present Status and Future Development -	
YOICHI KONISHI	
Worldwide Scientific Contribution of ILSI and ILSI JAPAN -----	6
KAGEAKI AIBARA	
The Trend on Safety of Foods Produced by Biotechnology -----	23
SHOGO KURASAWA	
Report on the Activities of ILSI JAPAN Committees -----	29
PR Committee	
TAKASHI AKIYAMA	
Editorial Committee	
SHINICHIRO AOKI	
Planning Committee on Scientific Research	
* Research Committee on Nutrition and Aging	
YOSHIYUKI OTA	
* Research Committee on Safety	
KATSUNORI OHSHITA	
* Research Committee on Nutrition of Fats and Oils	
TETSUO HINO	
Preparation Committee on Research Foundation	
FUMITAKE FUKUTOMI	
Editorial Board of Japanese Version "Nutrition Reviews"	
FUMITAKE FUKUTOMI	
International Contribution and Activities of ILSI as NGO -----	43
EDITORIAL COMMITTEE	
Member Changes -----	51
Record of ILSI JAPAN Activities -----	52
ILSI/ILSI JAPAN Publications -----	53
ILSI JAPAN Member List -----	59

実験動物に関する  
ILSI病理組織スライドセミナーと  
国際シンポジウム  
—現況と将来への展望—



奈良県立医科大学腫瘍病理学教授・がんセンター所長  
日本国際生命科学協会 副会長  
小 西 陽 一

I. はじめに

近年、動物を用いた化学物質の毒性と発癌性に関する研究は進歩し、その成績に関しては、ヒトに対する安全性の観点から国際的な評価がなされつつある。化学物質の安全性に関する研究は、形態と機能の両側面より追求されているが、形態学的変化の基盤は病理学にある。病理学は、肉眼的並びに顕微鏡下での像の観察を主とするもので、研究者の正確な知識と経験をなくしては主観と錯覚が混同して研究成績に影響を及ぼす。

実験動物における各種臓器の国際シンポジウムと病理組織スライドセミナーは、毎年異なったトピックスを選択し、1983年春以来奈良市にて行われている。その目的は、動物を用いて毒性と発癌性の研究に従事する人達への教育であり、国際的な最新の知識の普及と情報交換にある。現在までに取り上げられたトピックスは、内分泌系・消化器系・呼吸器系・尿路系・生殖器系・脳神経系・乳腺及び皮膚・造血器系・心血管系・筋と骨組織であり、1993年には特殊感覚器系が予定されてい

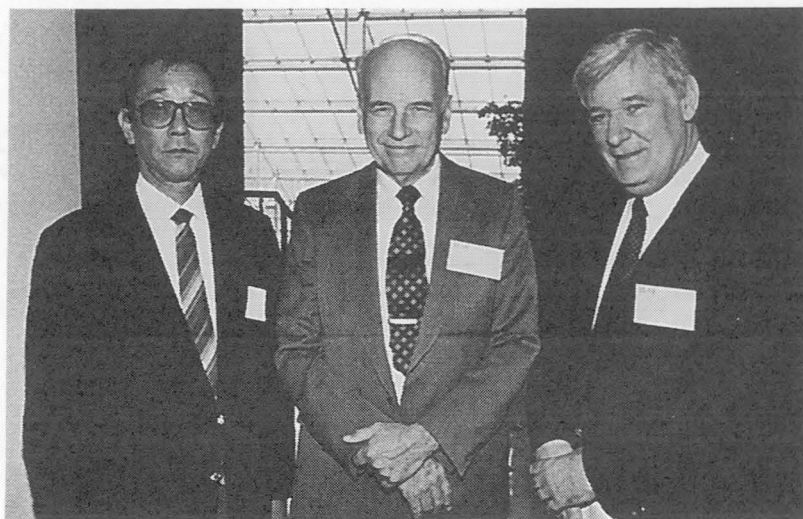
る。本シンポジウムと病理組織スライドセミナーは、過去10年間に亘り関係各位のご協力とご参加を得て、好評かつ成功せる学会で初期の目的を達しているものと判断される。本項においては、これまでの会の運営と経過について記すと共に、将来への展望についても触れたい。

II. 発足の背景とその運営

International Life Sciences Institute (ILSI) は、本部をワシントンD. C. に置き、Alex Malaspina博士を会長とする営利を目的としない科学財団で、その目的と広範な活動については本誌前号に紹介されている1)。ILSI JAPANは、1981年に故小原哲二郎会長のもとに発足し、過去10年間で世界一の支部に発展した。現在は角田俊直会長のもとに日本が世界へ貢献し得る課題として、ライフサイエンスを通じてより高いQUALITY OF LIFEの実現を追求すべく、より安全で、より健康な世界を目指して対応し

International Symposium and  
ILSI Histopathology Seminars  
in Laboratory Animals  
- Present Status and  
Future Development -

Dr. YOICHI KONISHI  
Department of Oncology Pathology,  
Cancer Center, Nara Medical Univ.  
Vice President, ILSI JAPAN



の協同作業で企画し実行してきた。即ち、毎年、各臓器のトピックスを選定し、それに適する FACULTY を数人選任して、まずヨーロッパを代表した会を9月にハノーバー医科大学で開催し、次いで同様のトピックスをアジアを代表して4月に奈良で開催した後、11月に米国獣医病理学会の開催地で開いてきた。奈良にお

ている。わが国における実験動物に関する各種臓器の国際シンポジウムと病理組織スライドセミナーの発足の背景についてはすでに記した<sup>2)</sup>。この会は文明の進歩に伴う環境因子に対する安全且つ健康な生活作りに貢献し得る基礎的な教育プロジェクトである。1983年のこの会の発足時においては、毒性学と病理学には一定の距離があり、病変に対する学術用語の国際的統一と生物学的意義の知識に欠けていたといっても過言ではない。過去10年間における科学の進歩は、形態と機能、言い換えると毒性学と病理学の距離を縮め、生物学としての総合的追求の必要性と国際的なハーモニゼーションの有効性を明確にしてきた。

ける会では、通常3日間のセミナーに加えて、石川栄世慈恵会医科大学名誉教授のご協力のもとにトピックスに適した国内からのシンポジストを選出し、わが国の研究レベルの紹介と情報交換を目的として1日のシンポジウムを加えている。このシンポジウムでは、ヒトの疾患に関する研究成果も発表されており、日常、動物を用いて研究をしている人達には貴重な情報を提供する場となっている。現在までに国外・国内からの招待演者は表1に示す如くで、米国・カナダより73人、欧州より21人、アジアより9人、国内より154人の合計257人を招待している。

奈良の会の運営については、実行委員とし

この会は、若い研究者の国際的感覚を奨励すると共に、自ら行う研究に対する一層の興味深さと責任感を持たしめるのに貢献してきている。

会の運営についての詳細は既に記した<sup>2)</sup>。会は、発足時からILSI本部の学術担当の副会長兼病理毒性研究所長であるドイツのハノーバー医科大学 Ulrich Mohr教授と米国ボストンのハーバード大学名誉教授である Thomas C. Jones博士と

表1：実験動物の各種臓器に関する国際シンポジウムと病理組織スライドセミナー

	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	合計
米・加	7	7	8	9	6	9	7	5	7	8	73
欧州	1	1	2	2	2	1	4	4	2	2	21
アジア			4**	3**					1***	1****	9
国内	9	13	25	15	16	13	19	14	16	14	154
合計	17	21	39	29	24	23	30	23	26	25	257

\* : Dr. T. C. Jonesと Dr. U. Mohrは除かれている  
 \*\* : 中国  
 \*\*\* : 韓国  
 \*\*\*\* : タイ

一に対する国内・国外よりの招待者数(人)\*

表2：実行委員会・委員

榎本 眞	(財)食品農医薬品安全性評価センター理事
藤原 公策	日本大学農獣医学部教授
林 裕造	国立衛生試験所安全性生物試験研究センター長
伊東 信行	名古屋市立大学医学部教授
Thomas C. Jones	ハーバード大学医学部名誉教授
小西 陽一	奈良県立医科大学教授
Ulrich Mohr	ハノーバー医科大学教授
西塚 泰章	愛知がんセンター研究所名誉教授
高山 昭三	昭和医科大学教授
蝶良 義彦	奈良県立医科大学名誉教授

(ABC順)

て表2に示す先生方の全面的なご協力を頂いている。過去10年間におけるテーマと参加者の推移は表3に示す如くで、現在までに924人が有料で参加してきた。招待演者に対しては、自宅から奈良間の運賃と滞在費を支払っているが、口演料は支払っていない。運営に関する経費は、約3分の2が寄付で賄われ、約3分の1が参加費で賄われている。経理は、会の初開催から現在まで松本義彦公認会計士

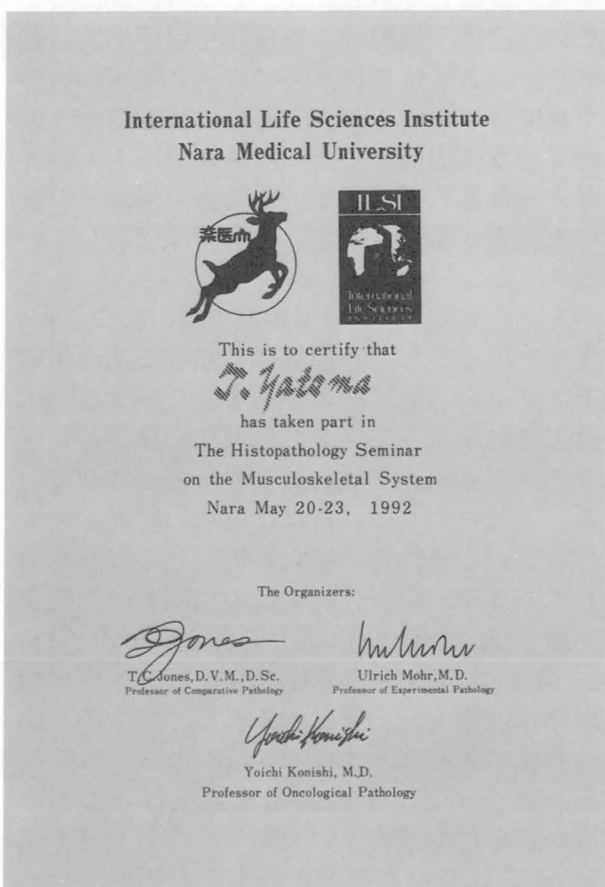
表3：実験動物の各種臓器に関する国際シンポジウムと病理組織スライドセミナーのテーマと有料参加者数の推移

回数	年度	テーマ	有料参加者数
1	1983	内分泌器官	80人
2	1984	呼吸器系	82
3	1985	肝・膵と唾液腺	94
4	1986	尿路系	91
5	1987	生殖器系	81
6	1988	神経系	82
7	1989	皮膚と乳腺	93
8	1990	造血とリンパ器官	104
9	1991	心・血管系	106
10	1992	骨・筋肉組織	111

により管理・決算されている。参加者には適当な参加費を頂き、セミナーで実際に使用されるカラースライド及び講演内容のテキストを渡している。又、第1日目のシンポジウム

終了後には、口演者と参加者の親睦を目的としたミキサーを開催し、奈良医大軽音楽部学生諸君の協力でミキサーをより一層楽しいものとしている。事務局は、奈良医大腫瘍病理学教室に設置し、会場の設営、参加者のリスト作製、印刷物の準備、参加者への対応など、毎年一定のプロトコールのもとに作業を行っている。参加者には、会の最終日に受講証明書を配布しており、

この証明書はドイツと米国と共通のものである。奈良はわが国最古の都として国際的に有名な都市であり、外国人は勿論のこと参加者は寺院と公園を主とした奈良独特のムードを楽しんでおられたであろう。



### III. 現況と将来への展望

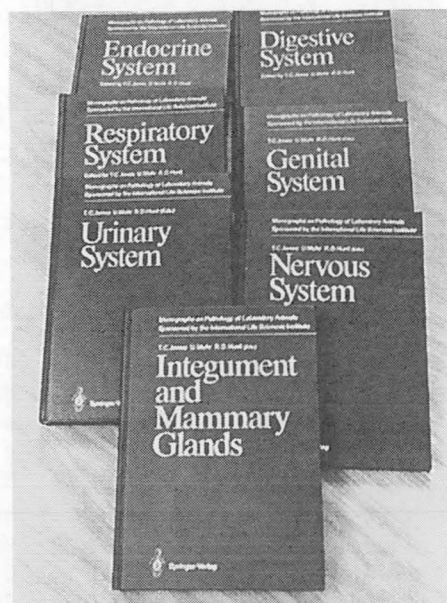
過去10年を振り返ると、この会が直面している種々の課題が挙げられる。この会は、初回から一括して英語を official language としている。参加者も始めのうちは英語に対する慣れの相違から、会場では、口演内容をテキストとにらみ合わせて必死にノートをとる姿を拝見した。しかし、数回を経過してからは、参加者は余裕をもって口演を開き、口演後の討論における英語での質問はhesitateされていても、コーヒープレイクの時やミキサーにては活発な討論がなされるようになった。この会は、若い人達の国際的感覚の獲得に学術用語の英語を介して貢献していると感じられた。

国際シンポジウムにおいては、毎年、林裕造先生による実験動物の各種臓器に出現する病変の安全性評価の観点からの意義についての講演がなされている。この講演は、参加者の属する研究所に貴重で国際的な up-date の情報を供給している。又、ヒトの病変についての口演は、動物のみの病変を病理学的に観察している参加者にとっては、ヒトへの外挿を想像はしているが、実際の口演を聞くと改めて動物の病変の意義の理解度が増すものと考えられる。従ってヒトと動物の病理学の接点を模索する観点からこの企画は成功している。

スライドセミナーよりの成果は、T. C. Jones 先生を中心とした各種臓器における病理組織モノグラフ・シリーズがある。このシリーズは、1983年より発刊され、既に全臓器の11シリーズが Springer-Verlag 社から販売されている。これらの本は、日常に動物の組織診断を行っている研究者の座右の書として好評を博しているが、現在、up-date の知識と研究成果を織り込み、改訂作業中である。一方、Dr. U. Mohr は WHO の協賛のもとに、病理組織用語の国際的統一をはかるべく、病変の正確な診断の組織像・文献を in-input としたコンピューター・ソフトの開発作業を行っており、近い将来に完成の予定である。このソフトに in-input されている病理組織用語の国際的統一の基準は、全て ILSI 病理組織スライドセ

ミナーの内容に基づくものであり、セミナーでは国際的な業績を持つ適切な口演者が選ばれていることが理解されるであろう。更に ILSI JAPAN では、1989年より、病理組織スライドセミナーの FACULTY より2人の演者を選択して、奈良の会の前後の日程で大阪と東京で口演会を催している(表4)。この口演会は、up-date の情報を1人でも多くの日本の研究者に伝えることを目的として開かれている。奈良における会の最大の目的は、日本の毒性と発癌性に関する研究レベルの向上にある。その成果は、政府機関の関係各省へ提出されるレポートの質の向上と国際的な場における発表の増加としてあらわれるであろう。

奈良における会は、1993年に特殊感覚器系のセミナーとして1シリーズは終了する。この機会に将来の毒性研究のあり方についてのシンポジウムを企画していると共に、既に Jones 博士と Mohr 博士の同意のもとに、1994年から11年を費やして第2シリーズの国際シ



ンポジウムとセミナーを企画している。1993年4月のシンポジウムでは、過去10年間の毒性学の進歩を整理すると共に、毒性学と病理学の接点を見いだして、毒性病理学をもととした、ヒトのより安全な、より健康な生活作りに貢献し得る研究の方向と必要性を模索せ



表4：病理組織に関する ILSI JAPAN  
講演会シリーズ

開催年度	テ ー マ	講 師	開催地
1989	皮膚毒性、老化病変	M.J.イムバー博士 (ハーバード大学) C.ザーハー博士 (オランダTNO)	東京
1990	免疫毒性等	P.K.パッテンゲル博士 (南カリフォルニア大学) J.エマーソン博士 (ILSI)	大阪・東京
1991	肝臓、心臓毒性	F.G.ミュリック博士 (米軍病理学研究所) B.M.ワグナー博士 (ニューヨーク大学)	大阪・東京
1992	内分泌系腫瘍、骨代謝	C.C.ケイベン博士 (オハイオ州立大学) J.O'D.マギー博士 (オックスフォード大学)	大阪・東京

んとするものである。近年の科学の進歩は目ざましく、病変の生物学的特性を分子生物学的手法を用いて遺伝子の変化を解析することが要求される時代となっている。又、分子生物学的手法を始め、近年に進歩した技術は、大学研究室独自のものではなく、一般研究室にまで急速なスピードで普及しようとしている。来年のシンポジウムでは、現在の毒性学の直面している問題を具体的に捕らえて、適切な研究材料と方法及びその成果の解釈を整理せんとするものであり、内容の充実した貴重なものとなろう。1994年より開始する第2シリーズのセミナーでは、分子生物学的または最新の免疫学的手法により得られた病変に対する新しい知識を紹介すると共に、研究者

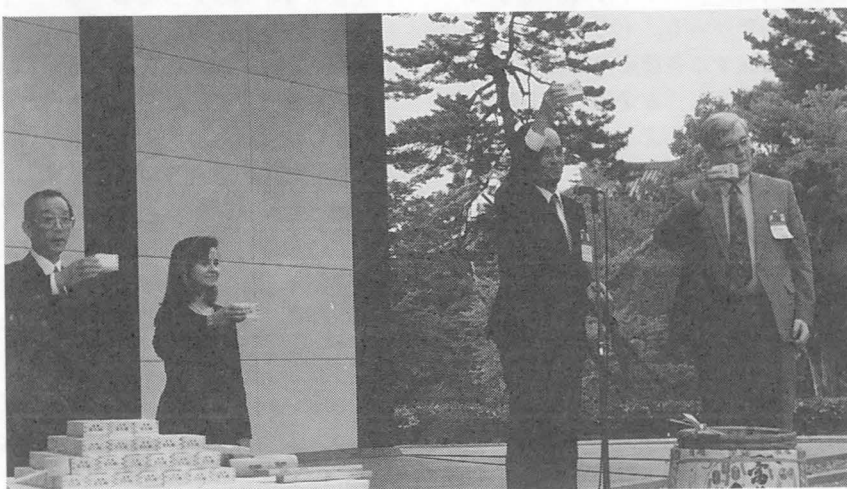
各自が安全性を評価し得る知識の教育を含めたものである。第一シリーズは、病変の診断に対する基礎教育を意図したものであるのに対し、第2シリーズは第1シリーズの応用的教育セミナーとなり得るものである。国外及び国内よりの、優秀な口演者を迎え、経費と時間を費やす会合である故、より多くの研究者の参加が望まれる。

#### IV. 終わりに

実験動物における各種臓器の国際シンポジウムと病理組織スライドセミナーの10年間の実績と現況及び将来について記した。この会を奈良市で開催する機会をご配慮頂いた国立がんセンター名誉総長、ILSI本部研究財団理事であられる杉村隆先生に御礼を申し上げます。又、終始この会をご支援頂いている日本毒性病理学会西山保一会長及び会員の皆様、奈良県及び奈良市当局に感謝致します。今後共に、この会を国際的レベルを保ちつつ一層の発展をさすべく努力を致しますので、皆様方のご支援とご協力を切にお願い致します次第です。

#### 文献

- 1) 福富文武：ILSI 31, 3-8 (1992)
- 2) 小西陽一：Oncologia 20(3), 157-160 (1987)



## ILSIの国際的活動と ILSI JAPANの科学研究活動に 期待されるもの



日本国際生命科学協会  
副会長 栗飯原 景昭

### 要旨

国際生命科学協会（ILSI）は、「より安全でより健康な世界を目指して」を旗印に、1978年米国において設置された。

ILSIは、幾多の専門領域の学術団体、あるいは同一業種間の連絡調整を目的とした各種業界団体とは、全く異なった特徴を有する非営利の科学団体として、欧米諸国では著名な存在である。

WHO、FAO、OECDなどの国際機関、各国政府機関、学術団体及び産業界をも横断した世界規模の調査研究相互協力体制を形成している。科学技術の進展に即応し、整理され、信頼性ある総合情報提供者としての評価が高い。これらの事業を支えて、ILSI研究財団が活躍している。

日本国際生命科学協会（ILSI JAPAN）は、ILSIの最初の支部として1981年設立され、1992年8月現在、会員企業64社を数える。この間東京において、栄養及び食品の安全分野の国際会議を4回開催し、そのプロシーディングス（和英両文）を出版したが、日本から世界への発信として、それぞれに世界各国で好評であった。

このような国際貢献に留まらず、会員への直接的貢献としては、適時多数の内外出版物の配布、著名な海外研究者を招待しての講演会、あるいは随時、食品の栄養や安全性に関する研究会などを開催した。その詳細は、ILSI JAPAN機関誌「食品とライフサイエンス No. 29」を参照されたい。

ILSI JAPANの今後10年を展望すると、ILSI本部の対等のパートナーとして、我々から発信する科学研究情報の独自性と信頼性の質を高める必要がある。そのために、ILSI JAPAN科学研究企画委員会において、会員自らがその何れかに参加して実施する各種研究委員会の総合的企画調整と、その活性化をはかっている。現在、「バイオテクノロジー」「油脂の栄養」「安全性」「栄養とエイジング」各研究委員会が活動を開始した。今後も、社会的要請、会員からの自発的提案等によって、適時必要な研究委員会の設置が有り得るであろう。その際の基本的方針として、次の諸点が考えられる。まず第一に、ILSI本部及び世界各支部の活動に関する情報を適格に収集吟味し、協調するところは協調するが、無駄な重複を生じないように配慮する。第二に、上記とも関連するが、わが国の科学研究陣が得意とする分野分野において問題を把握、課題を選定する。このことは、国際的貢献を考えた場合にも、ILSI JAPANの独自性を発揮し得る機会となる。第三は、ILSI JAPANの守備範囲とする栄養、健康、安全、環境に関わる社会的要請を先見し、先取りした課題に構成することである。それは会員各社の要請とILSI JAPANに対する期待に応える上でも重要なことである。

## I. ILSIの国際的活動

### (1) はじめに

ILSIが非営利の中立的科学研究団体として、“Toward A Safer, Healthier World”を合い言葉に、人類共通の希求である“Quality of Life”の向上を目標に展開してきた国際的貢献について簡単に整理しておきたい。ILSIが科学研究活動の社会還元を念頭に、研究分野として国境を超え、個々の企業活動を超え、そして学際的であり、しかも人々の日常生活に最も密接な栄養、健康、安全問題に焦点を合わせて出発したのが1978年である。爾来14年、ILSIは、生命科学の基盤を支える遺伝学、酵素学、免疫学など、生命の

仕組みの理<sup>コトワリ</sup>を窮める基礎研究助成を推進することに努力してきた。同時に、栄養はじめ上記研究分野の諸問題解決を目指した国際学会や国際会議の援助、また国連食糧農業機関

(FAO)や、世界保健機関(WHO)など国際機関への協力等々、実に多彩な学術的及び準学術的活動を展開してきた。この間に、邦貨に換算して30億円を超える資金が投ぜられた。

### (2) ILSI研究財団

ILSIの世界規模の前記諸活動を財政的に支えている組織が、個人、他財団、団体、諸企業など全世界からの寄金によって設立運営されているILSI Research Foundation(以下、研究財団と略)である。その事業ならびに運営、特に科学的諸活動の基本方針は、科学評議会によって決定される。その評議会は、数名のノーベル賞受賞者ならびに受賞者に匹敵する当代一流の学者12名から成り、我が国からは厚生省顧問、杉村隆国立がんセンター名誉総長が選任され、重責を荷負られて活躍されている。

将来を展望した基礎研究、緊急重要課題あ

るいは国際会議等の課題が評議会で決定される。選定された課題は、主として傘下の下記4研究所の何れかにおける計画的プログラムの一環として実施される仕組みとなっている。現在設置されているのは次の通りである。

Allergy and Immunology Institute  
(アレルギー・免疫研究所)

Human Nutrition Institute  
(ヒューマン・ニュートリション  
研究所)

Pathology and Toxicology Institute  
(病理・毒性学研究所)

Risk Science Institute  
(リスク・サイエンス研究所)

研究財団及び傘下4研究部門には、それぞれの領域の科学者を含め、一部重複もあるが、合計20名余の専任職員が配置されている。先述の12名の評議員以外に各部門には評議会において選任された科学顧問として、ILSI設立の趣旨と活動方針に理解と賛同を示した優れた研究者が世界各国から合計40名以上、研究財団の活動推進に参画している。

本研究財団は、他の多くの財団にも見られることであるが、自らが実験を実施する場は持たない。いわば姿無き研究機関の一つとして、人類共通問題である栄養、健康、安全に関わる諸問題、さらに最近では食生活に関連した環境問題の課題も含めて活動している。すなわちそれぞれの分野で、問題解決に長期間を擁する課題、研究成果が広く人類全体の生活向上に役立つことが期待される課題など、ILSIならではの広い複眼的視点に立ち、学、官ならびに民間の専門研究者集団間の調整、協同調査研究、研究助成を世界中で展開していることはよく知られている。最近の半年間におけるILSI JAPANとの関連事業だけ見ても、昨1991年10月、ILSI JAPAN創立十周年記念「第1回 栄養とエイジング国際会議」、本1992年4月「環境化学物質のヒトがん発生に対するリスク評

価」(東京及び大阪会場)、例年4月の「組織病理学スライドセミナー」(奈良)等、ILSI研究財団の支援のもとに行われたものである。

尚、ILSI環境保健科学研究所(Health and Environmental Sciences Institute)及び、ILSI栄養財団(The Nutrition Foundation, Inc.)については、本誌次の号に述べる。

1992年1月のILSI総会における報告によれば、ILSIに登録されている課題は92件に及んでいる(表1参照)。この中には、ILSI主催もしくは共催によって世界各地で行われた国際シンポジウムや国際会議とそれらのプロシーディングスの出版、専門学術図書刊行などが含まれている。一方、世界中の若い優れた研究者を対象としたILSI研究財団賞(3年間に10万ドル)、およびその他研究助成のため幾つかの冠記念賞などが例年公募されている。上述の表1によれば、本部諸活動および世界各支部の科学委員会

(Scientific Committee)、技術委員会

(Technical Committee)あるいはワーキンググループ等の活動状況を伺い知ることが出来る。尚、その詳細については、例年1月に開催されるILSI総会報告並びに議事録に公表されているので参照されたい。

### (3) ILSI各支部活動の特徴

①ILSI North Americaは、食品添加物、主要栄養素代替物、成人病と栄養、特に癌と栄養、残留農薬、口腔衛生など会員企業が直面しかつ社会的に大きな関心となっている共通問題を幅広く正面から取り上げている。本1992年1月の総会での研究課題討議に際して興味ある提案がなされた。すなわち、米国では従来Designer Foodsと呼ばれてきた一連の加工食品群に関して、日本が先鞭をつけた「食品の生理的機能解析に関する研究」の発想に倣い、Physiologically Functional Food Subcommitteeを設置して対応しようという提案である。

参加者から種々意見も出された問題提起として如何に落ち着くであろうか。

②ILSI Europeは、アルコール、食品添加物、残留農薬、食物繊維、軽カロリー食品、電子レンジ食品と容器包装材料などの他、運動と栄養をはじめ栄養に関する諸問題を当面の調査研究課題としている。EC統合にともなう欧州諸国間における食品行政の調和の問題、すなわちそれぞれに伝統ある食文化を背景に、総論賛成各論反対の傾向がうかがえる。漠然とした印象であるが、各会員企業グループの発言よりも、学・官分野からの発言が活発なように見受けられるが、いま一つ定かではない。将来、より密接な情報交換が望まれる。

③ILSI Australiaは、ILSI JAPANに次いで1983年に設立された。しかし、現状では表1に登録されるような活動はしていないようである。彼らのNewsletterによれば、日・欧・米からの情報と、国内の関連学会動向を会員に伝えつつ、随時シンポジウム等を開催している。

### ④その他地域のILSI活動

ILSI本部および先進支部の国際的連係を保ったNGO活動の成果を目の当たりにし、最近に至り発展途上地域における支部設立の動きが活発となってきた。すなわち、アルゼンチン(1990年)、ブラジル(1990年)、メキシコ(1991年)など次々と設立された。しかしながら、支部は原則的に自立活動を前提とするILSIにおいて、発足後間もないこれら支部活動は、距離的にも歴史的にも近い関係にあるILSI North Americaの協力を得ながら、その将来の方向を模索しつつあるというのが現状であろう。

以上、ILSI本部、特にILSI研究財団の活動とその国際貢献の概要をまとめ、次

いで世界の ILSI 支部について簡単にふれた。

#### (4) ILSI の国際活動と ILSI JAPAN の立場

ILSI JAPAN 今後10年の発展を考えた場合、世界各地における ILSI 支部の増加に伴って、相対的に ILSI JAPAN への期待と、必然的に先進支部としての責任も重くなることが考えられる。ILSI JAPAN の規模と財政の現況では、出来ることと出来ないことがあり、残念ながら或る時期までは、出来ないことについてはその対応原則を定めて不測の混乱を生じない配慮が必要であろう。そして何時の日にか将来は、ILSI 本部の良き対等のパートナー（共に労するパートナー）として、同様同質な貢献を通じ、世界から期待されている国際的 ILSI 活動への積極的協力が可能な ILSI JAPAN でありたい。

個人あるいは企業の奉仕活動というか社会還元が社会通念となっている欧米社会とは、政治、経済、社会の仕組み、特に税制の異なる風土の中で国際協力活動の実効をあげるには、ILSI JAPAN のように NGO として善意の協力を支えられて活動している任意団体では、将来を展望した場合に自ずから限界がある。本部と ILSI 研究財団の方式を参考に、福富事務局次長を中心に、かねてからの念願である研究財団設立問題に関して慎重な検討が行われている。

国際的経済協力はしばらく置くとしても、学術的あるいは技術的国際協力においては、ILSI JAPAN がかなりの潜在力を発揮していることは過去の報告を見れば明らかである。これらの分野において近い将来、我々がより充実した国際協力を推進するためには、ILSI 本部及び各支部に対して我々が発信する情報の独自性と信頼性をより一層高める必要がある。各専門分野の学術報告あるいは

それぞれの産業分野における技術情報に関しては、それぞれに優れた国際情報交流方式が活躍している時代である。このような情報過多とも言われる時代に、国内各会員にとって、また海外の ILSI グループにとって本当に必要な科学技術情報の再確認、あるいは各自の有する情報網では把握困難な情報について、要請に応じて間接直接にその収集を援助する仕組みを ILSI JAPAN として工夫する必要があると考えられる。その充実は、ILSI JAPAN の社会への奉仕活動の一助ともなり得るからである。

## II. ILSI JAPAN 科学研究活動

### (1) はじめに

十周年を経て新たな10年の出発に当たり、本1992年2月の役員会は、ILSI JAPAN の将来展望に関する多角的検討に終始した。結論の一つとして、科学研究調査活動を諸活動の中核として推進することが再確認された。

ILSI JAPAN が広範なライフ・サイエンス領域の中から、自らの科学研究活動の守備範囲としているのは、先述の如く栄養、健康、安全、環境の4分野である。全会員が自らその何れかの分野に参画して行う科学研究活動全般の企画調整は栗飯原副会長が担当することとなった。

しかし、それぞれの分野の専門性と特殊性を重視し、次のように4副会長の責任分担体制を採り、全体として調和のとれた活発な活動推進をはかることになった（表2参照）。

昨1991年に引き続き、1995年に「第2回栄養とエイジング国際会議」の主催がほぼ決定している栄養分野については木村副会長、ILSI JAPAN・厚生省・WHO 共催「バイオテクノロジー利用食品の安全評価と規制国際会議（1993年）」及びその他食品問

題を包括する健康分野は粟飯原副会長、「病理組織スライドセミナー」及び「同11周年記念国際シンポジウム（1993年）」が確定している特定安全性分野は小西副会長、そして近年世界的に注目されている水問題を中心とする環境分野を山本副会長がそれぞれに責任を分担して、ILSI JAPAN科学研究活動の活性化に万全を期することとなった。

科学研究活動の具体的な活動の方向性、適切な課題の選択、適時中間的進行状況評価、その他必要な助言等を行う内部アドバイザー的組織として科学研究企画委員会の設置が先の役員会で決定され、研究企画調整担当副会長を援けて早速4月以降その機能が発揮されている。

### (2) 科学研究企画委員会

科学研究企画委員会委員には、角田会長から次の理事諸氏が委嘱された。五十音順に、西村博理事（山之内製薬）、野中道夫理事（大洋漁業）、平原恒男理事（カルピス食品工業）、森田雄平理事（不二製油）及び山本良郎理事（明治乳業）の5氏である。

本企画委員会の目的は、研究活動の方向性を明示し、会員が積極的に参加して力を結集できる研究課題の選択に助言し、適時各研究委員会の進行状況に前進的評価と援助をすることにあり。

### (3) 研究委員会とWG

上記企画委員会の提言を受けて、役員会の決定によってその設置の定まった研究委員会及びその設置世話人は、研究委員会の目標、研究調査組織、研究計画、期待される成果等について基本的構想を練った上で、全会員に研究委員会への参加を呼びかける方式を採用している。研究委員会参加者が決定した後、会長から正式に各会員に委員就任のお願いがあって、各研究委員会は活動を開始する。

前年までの10年間にも数多くの研究ワーキ

ング・グループが活動し、その成果についてはILSI JAPANの機関誌「食品とライフサイエンス No. 29」（この誌名は No. 30を以て終わり、イルシー No. 31に継続されている）を参照されたい。従来ワーキング・グループ（WG）の名称の下に行われた諸活動を、今年度からは研究委員会とWG方式の2方式に区別することとした。

すなわち、一期2年として、二期もしくは三期にわたって研究活動の進展が予想される、基礎もしくは長期継続型研究は研究委員会に位置づけた。その性格は必ずしも画一的とはせず、参加者の総意を生かした実質的なものが望まれる。ある場合には、国公立機関の専門科学者や会員外専門家との学術的交流の場、ある場合は、企業研究所や研究開発部門の第一線の若手が、最先端の基礎問題を話題に、海外研究者も含めて自由に、白熱した討議をする会、または、実学的視点に立って、科学技術の側から一般社会と対話する共通の言葉を模索する会など、さまざまな工夫が、栄養、健康、安全、環境各分野において、それぞれに特色をもって展開されることが望まれている。

一方WG活動は、研究委員会とは多少趣を異にする。一企業あるいは一業種の責任範囲を超えて何らかの早急な解明が社会的に迫られている問題について、共通な認識を持つ会員が集まって対応する調査研究グループをWGと位置づけた。

ILSI JAPANは、研究委員会あるいはWGにおける研究結果をふまえて、民間の科学研究調査団体としてあくまでも中立的立場から、産官学、それぞれの意見や主張を、社会情報として客観的に提供する責任があると言えよう。現在既に出発した研究委員会は、油脂の栄養研究委員会（委員長：日野哲雄博士）、バイオテクノロジー研究委員会（委員長：倉沢璋伍博士）、栄養とエイジング研究委員会（委員長：大田賛行博士）及び安全性

性研究委員会（委員長：大下克典博士）の4グループである。これら4研究委員会の現況については、それぞれの委員長報告が別途本誌に掲載されている。尚、1992年8月末の時点では、WGは設けられていない。

### Ⅲ. おわりに

政治的軍事的大国の平衡の半世紀が終わり、世界に平和が訪れたのであろうか。生存競争は生物の習いとはいえ、世界各地特に多くの開発途上地域においては、飢餓と栄養失調、伝染病と餓死、人口急増、そしてそれ故の戦乱が絶えない。

一部に、21世紀はテクノロジーと経済支配の時代になるという声がある。しかし、その時代を安定した世紀とする為の基本哲学と技術創造は、生命科学の理解なくしては有り得ないであろう。それぞれの生物種、生物個体は特異性を有し、それぞれにあらゆる意味で限界のある存在であり、多種多様な生物で形成された生態系ほど安定性を示し、そして人類も生物の一員として例外たり得ないことを生物学は我々に教えてくれる。

かつて江上不二夫教授は、社会に奉仕する実学としての生命科学について、次のような意味の整理をされた。『生命科学は、第一に生物一般に対する理解を深め、第二にヒトという特殊な高等哺乳動物に対する生物学的理解を整理し、そして第三に、高次精神機能を発揮して社会生活を営む人間の現実的存在に対応する総合科学である』と。

ILSIが標榜する "Toward A Safer, Healthier World" の実現のために、我々は身近な、それ故にややもすれば一般にはその本質が見過ごされがちな問題、栄養、健康、安全、環境に焦点を絞った。ILSI JAPAN は、世界のILSIファミリーの一員として、ILSI JAPANならではの独自性に富

み、信頼性あふれた科学研究調査結果を中立的科学団体として発信し続けるであろう。ILSI JAPAN 科学研究企画委員会、研究会、WGの努力の積み重ねは、会員の結束を固め、よりよき成果となって国内国外を問わず多くの人々の "Quality of Life" の向上に寄与するであろう。希望を持って日々の努力を続けたいと思う。

## 表1: ILSIの活動(1992年1月現在)

## INTERNATIONAL LIFE SCIENCES INSTITUTE

## LISTING OF ACTIVITIES OF ILSI ENTITIES

JANUARY 1992

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
ADI	Workshop: "Scientific Evaluation of the Safety Factor for the ADI"	ILSI Europe Working Group on Toxicology (Laura Contor)/ ILSI Risk Science Institute (RSI)	March 10-11, 1992. Brussels, Belgium.
Alcohol	Identification of research programme	ILSI Europe Tech. Committee on Alcohol (Laura Contor)	Fund raising underway.
Allergy	Supplemental fellowships	ILSI Allergy and Immunology Institute (AII) (Sharon Weiss)	Deadline for applications, April 1992.
Allergy	Symposium: "Food Allergy and the Lung"	ILSI AII (Sharon Weiss)	March 12-13, 1992. Orlando, FL, USA.
Allergy	Concise monograph of symposium: "Food Allergy and Food Intolerance" (held June 1990)	ILSI Europe Working Group on Nutrition (Uta Priebe)	Publication expected early 1992.
Allergy	Committee Meetings: "Allergenic Components in Food"	ILSI Brazil (Waldemar Almeida)	Industry members; invited lecturer. In preparation.
Antioxidants	Research Project: "Inhibition of Action of a Food-borne Carcinogen by BHA and BHT"	ILSI N.A. Antioxidant Committee (Karen Taylor)	Finalizing protocol.
Basic Research	Future Leader Awards	ILSI N.A. (Lili Merritt)	June 1, 1992 deadline for nominations. (Note: open to North American residents only)



<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Beverage Emulsion Stabilizers	Finalization of research programme	ILSI Europe BEST Committee (Laura Contor)	Laboratory selection underway.
Caffeine	7th International Caffeine Workshop	ILSI N.A. Caffeine Committee (Lili Merritt)	June 1993. Greece. Planning stage.
Caffeine	Funding research in the area of withdrawal and exposure levels and basic mechanisms	ILSI N.A. Caffeine Committee (Lili Merritt)	Under consideration.
Cancer	Proposed conference on Breast Cancer	ILSI Research Foundation (Suzanne Harris)/Centers for Disease Control/ American Cancer Society	1993. Planning stage.
Carcinogenesis	Carcinogenicity Working Groups (Cancer Dose-Response, Peroxisome Proliferation, Thyroid)	ILSI RSI (Carol Henry)	Ongoing activities; limited participation; invited experts.
Carcinogenesis	Publication of proceedings of Nutrition & Cancer Conference (held April 1991)	ILSI Research Foundation (Lili Merritt)	Publication expected April 1992.
Carcinogenesis	Symposium: "Cell Proliferation and Chemical Carcinogenesis"	ILSI RSI (Carol Henry) and NIEHS	January 14-16, 1992. North Carolina, USA.
Central Nervous System	Symposium: "Nutrition and Central Nervous System Function"	ILSI N.A. Diet & Behavior Comm. and Aspartame Committee (Catherine Nnoka)	Feb. 2-6, 1992. Tahoe City, Calif., USA.
Children	Publication of proceedings of conference: "Similarities & Differences Between Children and Adults: Implications for Risk Assessment" (held Nov. 1990)	ILSI RSI (Steve Olin) and ILSI N.A. Residue Committee (Gretchen Bretsch)	Publication expected early 1992.
Cholera	International Meeting: "Cholera in the American Continent"	ILSI Brazil (Waldemar Almeida)/ UNICAMP/Brazil Ministry of Health/PAHO	May 18-20, 1992. Sao Paulo, Brazil.

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Complex Carbohydrates	Workshop: "Physiological Effects of Complex Carbohydrates"	ILSI Human Nutrition Institute (HNI) (Suzanne Harris)	April 1992. Washington, DC, USA.
Consumer Protection	Committee Meetings: "Code for Consumer Protection: Industry, Government and Consumer Responsibility"	ILSI Brazil (Waldemar Almeida)	Industry members; invited lecturer. In preparation.
Diet and Health	Concise monograph of symposium "Diet and Health in Europe: The Evidence?" (held Oct. 1989)	ILSI Europe Working Group on Nutrition (Uta Priebe)	Publication if money is available.
Dietary Fat	Publication of proceedings of workshop: "Dietary Fatty Acids and Thrombosis" (held March 1991)	ILSI N.A. Food, Nutrition and Safety Committee (FNSC) (Karen Taylor)	In preparation.
Dietary Fat	Conference on the metabolic effects of stearic acid and other long-chain saturated fatty acids	ILSI N.A. FNSC Subcommittee on Fatty Acids and Health (Karen Taylor)	Conference planning to begin in 1992.
Dietary Fibre	Research programme on "Fermentability of Dietary Fibres - in vitro and in vivo"	ILSI Europe Tech. Committee on Dietary Fibres (Uta Priebe)	2-year project started May 1991.
Dietary Fibre	Publication of proceedings of workshop: "Dietary Fibre - A Component of Food - Nutrition Function in Health and Disease" (held April 1991)	ILSI Europe Working Group on Nutrition (Uta Priebe)	Publication expected May 1992.
Dietary Surveys	Analysis of USDA-NFSC 1987-1988 Surveys - Phase II	ILSI HNI (Suzanne Harris)	March 1992.
Environment	United Nations Conference on Environment and Development (UNCED)	UN/ILSI attending as NGO (Paivi Julkunen)	June 1-12, 1992. Rio de Janeiro, Brazil.

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Environment	Environmental Seminar	ILSI Argentina (Juan Carlos Lopez Musi)	September 1992.
Essential Elements	Risk Assessment of Essential Elements	ILSI RSI (Carol Henry, Steve Olin)/ U.S. Environmental Protection Agency (EPA)	March 9-13, 1992. Washington, DC, USA.
Food Contaminants	Evaluation of toxicological risks of contaminants present at low levels	ILSI Europe Tech. Comm. on Food Contaminants (Laura Contor)	Report in progress.
Food Microbiology	Funding research on <u>Listeria monocytogenes</u>	ILSI N.A. Committee on Food Microbiology (Catherine Nnoka)	Proposals requested. Applications due February 14, 1992.
Food Microbiology	Minimum Ineffective Dose Questionnaire	ILSI Europe Working Group on Microbiology (Laura Contor)	Survey report, early 1992.
Food Microbiology	Preparation of HACCP Monograph	ILSI Europe Working Group on Microbiology (Laura Contor)	Publication mid-1992.
Food and Nutrition Policy	Second European conference organized by the Ministry of Welfare of The Netherlands, WHO, & TNO Nutrition & Food Research Institute	ILSI Europe Working Group on Nutrition (Michel Fondu)	April 21-24, 1992. The Hague, The Netherlands.
Food Policy Trends	Publication of proceedings of symposium (held Oct. 1990)	ILSI Europe (Michel Fondu)	Early 1992.
Food Technology	Cosponsoring of Second Latin American Congress in Food Technology	ILSI Mexico (Silvia Canseco)	Sept. 28-Oct. 3, 1992. Mexico City, Mexico.
Foodborne Diseases	Seminar: "Foodborne Intestinal Diseases"	ILSI Mexico (Silvia Canseco)	August 1992. Tentative.
Free Trade	Seminar: "Technical Barriers to the Free Trade Agreement"	ILSI Mexico (Silvia Canseco)	April 1992. Planning stage.

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Fructose	Monograph on fructose	ILSI N.A. FNCS Subcommittee on Fructose (Catherine Nnoka)	Publication expected October 1992.
Histopathology	Seminars:	ILSI Pathology and Toxicology Institute (PTI)	
	Musculoskeletal	ILSI PTI/ILSI Japan (Yoichi Konishi, Nara Medical School)	May 20-23, 1992. Nara, Japan.
	Endocrine	ILSI PTI (Ulrich Mohr, Hannover Medical School)	Sept. 2-4, 1992. Hannover, Germany.
	Eye and Ear	ILSI PTI (Sharon Weiss)	Nov. 14-16, 1992. San Diego, CA, USA. Planning stage.
Histopathology	Monographs:	ILSI PTI (T.C. Jones)	
	Volumes 11 and 12, <i>"Non-Human Primates"</i>		In preparation.
Histopathology	ILSI to co-sponsor registry of tumors developed by Hannover Medical School with WHO co-sponsorship	ILSI PTI (Ulrich Mohr)/WHO	Initiated.
Indoor Air	Publication of proceedings of conference: "Methodology for Assessing Health Risks from Complex Mixtures in Indoor Air" (held April 1990)	ILSI RSI (Carol Henry)	Publication expected January 1992.
Inhalation Toxicology	Kenneth Morgareidge Award for inhalation toxicology research	ILSI (Fran DeLuca)	Deadline for applications September 1992.

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Inhalation Toxicology	4th Inhalation Symposium: "Particulate Matter"	ILSI Research Foundation (Sharon Weiss, Ulrich Mohr)	March 1-5, 1993. Hannover, Germany.
Lead (see Trace Minerals)			
Light Products	Preparation of document on light foods	ILSI Europe Technical Comm. on Light Products (Uta Priebe)	Outline underway.
Macronutrient Substitution	Pilot Research Project: "Pre- dicting the Impact of Broad Macronutrient Substitution in the Food Supply"	ILSI N.A. Committee on Macro- nutrient Substitution (Karen Taylor)	Preliminary report expected January 1992.
Macronutrient Substitution	Environmental impact of macronutrient substitution	ILSI N.A. Committee on Macro- nutrient Substitution (Karen Taylor)	Identification of issues.
Micronutrient Malnutrition	Proceedings of Workshop: "Integrated Strategies for Controlling Micronutrient Malnutrition" (held Nov. '91)	ILSI HNI (Suzanne Harris) with U.S. Centers for Disease Control	Spring 1992.
Microwave Ovens	Net Protein Utilization Study	ILSI Europe Technical Comm. on Microwave Ovens (Laura Contor)	Publication expected spring 1992.
Microwave Ovens	90-day rat diet study	ILSI Europe Technical Comm. on Microwave Ovens (Laura Contor)	Funds search underway.
Microwave Ovens	Concise Monograph	ILSI Europe Technical Comm. on Microwave Ovens (Laura Contor)	Under review and protocol finalized.
Mouse Liver Tumor	Mouse Liver Tumor Working Group	ILSI RSI (Steve Olin)/ILSI Health and Environmental Sciences Institute (HESI) (Gretchen Bretsch)	Ongoing activities; limited participation; invited experts.
Natural Toxins	Screening subcommittees for data	Joint IPCS/ILSI Europe Working Group on Natural Toxins (Laura Contor)	Literature survey under- way; reports expected February 1992.

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Natural Toxins	Priorities for workshops	Joint IPCS/ILSI Europe Working Group on Natural Toxins (Laura Contor)	Meeting March 1992.
Natural Toxins	Cosponsoring VII IUPAC International Symposium on Mycotoxins and Phycotoxins	ILSI Mexico (Silvia Canseco)	November 8-12, 1992. Mexico City, Mexico. Document to be published.
Novel Foods	Workshop: "Nutritional Evaluation of Novel Foods"	ILSI Europe Technical Comm. on Novel Foods (Laura Contor, Uta Priebe)	May 1992. Brussels, Belgium.
Nutrition (Aging)	Proceedings of "First International Conference on Nutrition and Aging" (held October 1991)	ILSI/ILSI Research Foundation (Suzanne Harris)/ILSI Japan (Fumitake Fukutomi)	Proceedings in <i>Nutrition Reviews</i> . 1992. Japanese edition also being prepared.
Nutrition	Nutrition Week: Sponsoring speaker on "Nutrition Labelling in the U.S."	ILSI Mexico (Silvia Canseco)	February 10-14, 1992.
Nutrition	Publication of proceedings of Smithsonian/World Food Prize Colloquium: "Frontiers of Nutrition and Food Security" (held October 1990)	ILSI N.A./Smithsonian Institution Press (Roberta Gutman)	Publication expected May 1992.
Nutrition	Proceedings of Workshop: "Child and Adolescent Obesity" (held November 1991)	ILSI N.A. FNSC Subcommittee on Child and Adolescent Nutrition (Suzanne Harris)	1992.
Nutrition	Involvement with WHO/FAO International Conference on Nutrition	ILSI WHO/FAO Coordinating Committee (Suzanne Harris)	Dec. 5-11, 1992. Rome, Italy. ILSI has representative on advisory group.
Nutrition	XV IVACG Meeting: "Towards Comprehensive Programs in Reducing Vitamin A Deficiency" (working title)	Nutrition Foundation, Inc. (International Vitamin A Consultative Group) (Laurie Lindsay Aomari)	Jan. or Feb. 1993. Arusha, Tanzania or another site in Africa.

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Nutrition	Workshop: "Physical Activity and Nutrition"	ILSI Europe Working Group on Nutrition (Uta Priebe)	1993. In preparation.
Nutrition	Conference on Nutrition and Performance	ILSI (Suzanne Harris)	1995. Atlanta, GA, USA. Proposed.
Nutrition	Collaboration of the EC Programme on Nutrition	ILSI Europe Working Group on Nutrition (Uta Priebe)	Under discussion.
Nutrition Monitoring	Preparation of comments on proposed ten-year plan for U.S. nutrition monitoring system	ILSI N.A. FNCS (Suzanne Harris)	January 1992.
Oral Health	Literature review on oral health and the elderly	ILSI N.A. Oral Health Committee (Catherine Nnoka)	In preparation.
Oral Health	Survey on dental erosion	ILSI N.A. Oral Health Committee (Catherine Nnoka)	Underway.
Oral Health	Formation of Technical Committee on Oral Health	ILSI Europe (Uta Priebe)	Planning stage.
Packaging Materials	Data base programme	ILSI Europe Task Force on Packaging Materials Data Base (Francis Close, Michel Fondu)	Underway.
Pesticide Residues	Selection of pesticides of concern	ILSI Europe Technical Committee on Pesticides (Laura Contor)	Data gathering underway.
Physiological Parameters	Working Group Meeting on S. Lindstedt compilation of physiological parameters (held November 1991)	ILSI RSI (Carol Henry)/EPA	Publication expected Spring 1992.

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Physiologically Functional Foods for Health Promotion	Commissioning a paper to review this area	ILSI N.A. FNSC Subcommittee on Physiologically Functional Foods for Health Promotion (Designer Foods) (Karen Taylor)	Under consideration.
Promotional Materials	Publication of ILSI brochure in Spanish	ILSI Mexico (Silvia Canseco)	Publication expected March 1992.
Risk	Project on Aggregate Risk	ILSI N.A. Residue Committee (Gretchen Bretsch)/ILSI RSI (Steve Olin)	Under discussion.
Risk	5th Regional Risk Assessment Workshop: "Harmonization/Education Efforts with State Officials"	ILSI RSI (Carol Henry)	April 20-23, 1992. Boston, MA, USA.
Risk	Seminar: "Risk Assessment of Chemicals and Human Health"	ILSI Brazil (Waldemar Almeida)/ UNICAMP	Mid-1992. Sao Paulo, Brazil. In preparation.
Safety (Food)	Publication of paper: "Evaluating the Safety of Carcinogens in Food - Current Practices and Emerging Developments"	ILSI N.A. Residue Committee (Gretchen Bretsch)	Early 1992.
Safety (Food)	2nd Asian Conference on Food Safety	ILSI (Lili Merritt)/FAO	1994. Bangkok, Thailand.
Sensory Perception	Workshop: "Sensory Perception in Aging: Recent Advances and Current Research Needs"	ILSI N.A. Committee on Nutrition and Aging (Catherine Nnoka)	March 11, 1992. Alexandria, VA, USA.
Solid Waste/ Recycling	Panel Meeting: "Potential Hazards of Municipal Solid Waste Recycling"	ILSI RSI/EPA Cooperative Agreement (Carol Henry)	January 1992; Second expert panel; invited experts.
Solid Waste	Conference: "Solid Waste Recycling - Benefits & Potential Hazards"	ILSI HESI Solid Waste Task Force (Gretchen Bretsch)/ILSI RSI (Carol Henry)	Late 1992. Providence, RI, USA. Planning stage.



<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Special Foods	Committee Meetings: "Food for Minority Groups and Special Physiological Problems"	ILSI Brazil (Waldemar Almeida)	Industry members; invited lecturer. In preparation.
Toxicology	Latin American Seminar: "End Points in Toxicological Evaluations"	IPCS/WHO; UNEP; ILO/State University of Campinas (UNICAMP)/ ILSI Brazil (Waldemar Almeida)	Oct. or Nov. 1992. Campinas, Sao Paulo, Brazil. Planning stage.
Toxicology & Environmental Health	Basic Research Grant	ILSI Research Foundation (Sharon Weiss)	One award; winter 1992.
Toxicology Testing	Paper on the comparative methods of toxicology testing	ILSI Europe Working Group on Toxicology (Laura Contor)	In progress.
Trace Minerals	Issue identification	ILSI N.A. FNCS Subcommittee on Trace Minerals in Foods (Catherine Nnoka)	Subcommittee identifying and prioritizing issues.
Vitamins and Minerals	Concise monograph of workshop: "Modern Lifestyles, Lower Energy Intake, and Micronutrient Status" (held March 1989)	ILSI Europe Working Group on Nutrition (Uta Priebe)	Publication expected early 1992.
Water Quality	Meeting: "Waste Water Treatment"	ILSI Mexico (Silvia Canseco)	May 1992. Planning stage.
Water Quality	First International Conference on the Safety of Water Disinfection: "Balancing Chemical and Microbial Risks"	ILSI HESI (Gretchen Bretsch)/RSI (Paivi Julkunen) co-sponsorship with PAHO/EPA/ FDA/WHO	Aug. 31-Sept. 3, 1992. Washington, DC, USA.

表 2 : 表 1 以外の I L S I J A P A N の 活 動

<u>TOPIC</u>	<u>ACTIVITY</u>	<u>ENTITY AND CONTACT</u>	<u>DATE/STATUS</u>
Biotechnology	Japanese translation of FAO/WHO report: "Strategies for assessing the safety of foods produced by biotechnology"	ILSI Japan (K. Aibara)	Published May 1992
Biotechnology	Symposium: "Assessing the safety and efficacy of foods produced by biotechnology"	ILSI, ILSI Japan (K. Aibara)	May 1993 Planning stage
Nutrition (Aging)	Symposium: "Aging and Nutrition"	ILSI Japan (F. Fukutomi) Food Industry Center	Oct. 25, 1992 Sendai City, Japan
Toxicology	The Nara International Symposium: "Future development of research in Toxicology"	ILSI, ILSI Japan ILSI PTI, Nara Medical College	April 21-22, 1993 Planning stage

## バイオ食品の安全性に関する最近の動向



バイオテクノロジー研究委員会  
委員長 倉沢璋伍

5月27日付け新聞各紙に「遺伝子組換えの食品—米政府が解禁」、「遺伝子組換え食品規制緩和」などの大見出しで米国の新しいバイオ政策が報じられました。米国FDAは、ヨーロッパやオーストラリアではすでに認可され実用に供されていた凝乳酵素キモシンを1990年にGRASとして認可していますが、今回の政策発表は組換え植物、すなわち穀物や野菜など直接組換え体を食べるバイオ食品を対象にしたもので、これらを特別視して新たな法律で規制する必要はないということを世界で始めて明確に打ち出したものです。この政策は、今後わが国ばかりでなく、ヨーロッパ諸国にも大きな影響を与え、バイオ食品の実用化が一層促進されると思われます。

組換えDNA技術は米国で開発された大変に画期的な技術です。この米国生まれであるということが、最近話題の特許・知的財産権のように、投資に見合った利益は十分に享受したい、この分野でも世界のリーダーシップを取り続けたいとする米国の官・産・学一体となつての意気込みが強く感じられます。

バイオ食品の安全性についての最近の世界の動きを見てみると、この様な背景を持った

米国の強力な指導力が大きな推進力になって進んでいると思われまふ。そのことは後で詳細にふれるとして、まずは組換え技術の安全性に関する事の起こりから復習しておきたいと思ひます。

### 安全対策の始まり

組換えDNA技術は、これが全く新しい技術であるが故に、“予期しえない危険性”があるかもしれないという懸念が1973年のゴードン会議で科学者自らによって提示されました。1975年のアシロマ会議ではそのような危険性を回避するために、慎重を期して研究当事者が自主的管理を行なうという基本的立場にたつての安全対策が討議されています。この会議の成果は、1976年に米国立衛生研究所(NIH)の「組換えDNA実験ガイドライン」として具体化され、以後、このガイドラインが国際的な安全対策の基準として指導的役割を果たしてきました。

我国においてもNIHのガイドラインを参考にして、1979年相次いで、大学等の研

究機関を対象にした組換え実験指針を文部省が、また民間企業を対象にした組換え実験指針を科学技術庁が策定しております。

組換え実験が始められてから20年が過ぎようとしています。この間、世界中で数え切れないほど多くの実験が行われてきました。その間に膨大な量の安全利用の実績と科学的知見が積み重ねられ、現在では、組換え技術そのものによる「未知のリスク」や「固有の危険性」は存在しない事が共通認識となっています。

NIHのガイドラインはこれまでに14回に亘って規制緩和の改訂が行われておりますが、わが国の文部省や科学技術庁の指針も含め世界的に実験指針の緩和が進められています。

#### 産業利用における安全対策

組換え体利用の安全対策については、新たな貿易障害とならないよう、経済協力開発機構(OECD)の科学技術政策委員会(CSTP)において各国の専門家による科学的知見に基づいた議論を行い、国際的合意のもとに基本的枠組みが作られています。

1983年からCSTPバイオテクノロジー安全性専門家会合において安全対策の検討が始められましたが、その検討結果が、1986年「組換えDNA技術の安全性の考察」としてまとめられOECD理事会に提出されています。その報告書には、当初心配された潜在的危険性は推測上のものに過ぎず、事実に基づいたものになっていないと述べられ、組換え技術の実行と応用に対して特別に法律を制定する科学的根拠はないとの判断を示しています。OECD理事会はこの報告を踏まえ、1986年「工業、農業及び環境で組換え体を利用する際の安全性の考察に関する理事会勧告」を採択し、加盟国に対し指針によ

る安全対策の推進を勧告しました。

我国においては、この理事会勧告に準拠して、1986年に通産省の「組換えDNA技術工業化指針」、厚生省の「組換えDNA技術応用医薬品の製造のための指針」が、1989年に農林水産省の「農林水産分野等における組換え体の利用のための指針」が制定されています。また、昨年末厚生省より「食品分野へのDNA技術応用に関する指針」の通達が出され、本年4月1日より運用が開始されました。この厚生省の指針は、これまでの各省庁の指針が製造プロセスのみを対象にしたものであったのに対し、製造指針と製品の安全性評価指針の両方から成っていること、また輸入の際にも適用される(安全性評価指針のみ)ことが特徴的といえます。

#### バイオ食品の安全性

OECDのCSTPでは先に述べた理事会勧告を以て第1ラウンドの活動を終え、1988年からは第2ラウンドとして加盟国の専門家によるバイオテクノロジー安全性専門部会を設置し、個別の問題に対応したきめ細かい活動を始めました。そこで科学的知見に基づいた検討が行われ、安全性評価の基本原則はプロセスベースではなくプロダクトベースで行う事が合理的であるとの認識が定着しています。

そのプロダクト分野別の検討の最初の例として、1990年10月に食品安全性部会(WGIV)が設置され、バイオテクノロジーによって製造された食品及び食品成分の安全な使用を評価するための科学的問題と原則の議論がはじめられています。ここでは、食品添加物、汚染物質、加工助剤、包装材料については、安全性評価の科学的原則は各国で、また国際的にも十分確立しているとしてとり上げないことにしています。

1991年6月と9月の2回に亘り安全性評価の具体的議論が行われています。その結果、

(1)食品の安全性評価については「①伝統的な方法で製造され、かつ食されてきた食品は長年の経験により安全と考えられている。②毒性物質を含む食品であっても有害とみなされない限り、それは安全な食品である。」という基本的考え方に立ち、(2)新しいバイオテクノロジーを利用して作られた食品の安全性について「ニューバイオテクノロジーは、食品の安全性評価と安全性確保に対し分子レベルでの(オールドバイオ)より正確な情報と技術をもたらすので、ニューバイオ食品が伝統的食品よりも安全性に低い食品が得られることはない。従って、新しい安全性基準を定める必要がない」との合意が得られています。(3)このような考え方、合意に基づき新しい食品を人が消費する際の安全性評価に対し、既存の食品との比較において実質的に同等(Substantial Equivalence:SE)という概念が提案され、さらに実質的同等性を判断する上で各国が持ち寄った具体例(キモシンと $\alpha$ -アミラーゼ(米国)、乳酸菌(オランダ、デンマーク)、ナタネ油(カナダ)、マイコプロテイン(英国)、パン酵母(英国)、トマト(デンマーク)、ポテト(オランダ)、コメ(日本)、動物(米国))を討議し基本的合意が得られています。

この結論は事務局により分科会報告書「ニューバイオテクノロジー応用食品の安全性評価の基礎となるコンセプトと原理」として巻末に事例集を配してまとめられ、各国のコメントを取り入れ近々公表されることになっています。この報告書では「もし新しい食品が既存の食品と実質的に同等と判断された場合には、その食品は安全性に関し既存の食品と同様に扱うことができる。それ以上の安全性の懸念はない」と結論し、実質的同等の例としてポテトをあげ、「ポテトは長い間食べら

れていて、天然にウイルス感染してウイルスのコート蛋白を含むポテトを長い間食してきた歴史がある。コート蛋白が毒性で問題となったことはなく食品安全性上の問題はない。従って、バイオテクノロジーでコート蛋白を移入したポテトも長い間食経験のあるウイルス感染ポテトと実質的同等である。」と明快に記述しています。

#### WHO 専門家会議

OECDのバイオ食品安全性部会が設置された直後の1990年11月、バイオ食品の安全性に関するFAO/WHO合同専門家会議がジュネーブで開かれました。この会議は、国連機関としてバイオテクノロジー応用食品の研究が急速に進展し実用化に入ってきた現状を踏まえて、バイオテクノロジー応用食品の安全確保に関する国際的調和を配慮して開いた最初のものであります。

日本代表として故小原会長のもとに参加要請があり、結局栗飯原副会長が招待発表者として、またバイオテクノロジーWGサブリーダーの高野俊明氏がオブザーバーとして出席しました。

会議は第1部「食品バイオテクノロジーの現状」、第2部「食品中に意図的もしくは随伴的に組み込まれる物質のバイオテクノロジー」、第3部「バイオテクノロジー応用食品の潜在的危険可能性の列挙ならびに安全性評価原理」、第4部「バイオテクノロジー応用食品に対する安全性評価方法の現状の例示」の4部に大別されますが、栗飯原副会長に要請された宿題発表は、第3部の中での“発酵食品における潜在的危険可能性”という大変にまとめるのがむずかしいテーマでありました。バイオテクノロジーWGではそのための準備会を持ち、会員企業が分担して発酵食品の現状のデータを持ち寄り発表内容を種々討

議し、資料作りを行いました。苦勞の甲斐あってか会議では大変によい評価を受けたということでした。なお、そのときの各々の準備資料を講演形式にまとめ、その後のWG会議でメンバーの皆様に報告されています。

会議の内容については、すでに「食品とLS」No. 28 (1991) に粟飯原副会長が詳細に報告しておられるので省略しますが、ここでの結論も「世界の食糧問題の量と質の向上にとってバイオ食品への期待と可能性は大きい。この新技術が適切に導入されるならば、安全性に関し従来技術と比較して新たな固有の問題はない」という科学的事実を踏まえた大変に合理的なものである。また新開発食品の安全性や栄養価の評価には従来の同種食品を対照とした対比が重要であると、そのためのデータベース設立の重要性を指摘しているが、これはOECDの実質的同等性と同じ概念と理解される。

この会議録はWHO事務局によってまとめられ、1991年12月にWHO単行書籍として出版されました。その日本語版についてはWHOの許可を得て、粟飯原副会長とバイオテクノロジーWGの有志により直ちに翻訳に着手し「FAO/WHOレポート バイオ食品の安全性」として建帛社より出版されています。

#### 米国のバイオ政策

再び米国の動きに戻ってみたいと思います。ここ数年のバイオ政策に関する米国の動きは急で、主要なものを以下のようにまとめることができます。

#### 1990. 8 大統領府「バイオテクノロジーの規制の基本原則」

規制は製品そのものの特性とリスクに注目して実施すべき等いわゆる4原則の発表。

#### 1991. 2 大統領競争力委員会「バイオテクノロジー連邦政策報告書」

今後、基本原則等に沿いプロダクトベースを基本とした施策の展開を勧告。

#### 1992. 2. 24 ブッシュ大統領「バイオ製品に関する連邦法規の整備」

計画は、クエール副大統領を議長とする大統領競争力委員会で作成され、安全、健康及び環境を保護すると共に、バイオ製品の開発を阻害する不要な規制を撤廃することが目的。

大統領競争力委員会の改善構想：

第1段階—科学技術政策局が、今週、環境へのバイオ製品の計画的導入に関する最終監督範囲指示書を発表する。最終監督範囲指示書は各省庁が実験室外で使用されるバイオ製品を監督するときの法的裁量権の行使に関する規制方法を定めている。監督範囲は1991年のバイオテクノロジー連邦政策報告書の勧告を受けて決定。

第2段階—各種バイオ製品の監督官庁が、原則案を徹底的に検討して発表する。

第3段階—「ワンストップショッピング」原理に基づき詳細な「ロードマップ」を作成。バイオ製品の商業化に関する連邦政府の認可を得るための経路を明確にする。

この第1段階の方針発表が2月24日大統領直属の科学技術政策局局長よりあり、2月27日付け官報に「法的権限内における政府監督権の行使：環境へのバイオ製品の計画的導入」として掲載されました。

このような過程を経て冒頭のクエール副大統領の「FDAのバイオ食品政策」発表に至るわけですが、これはバイオ食品に関しFDAは上記第2段階、第3段階を一気に発表したということになります。

バイオ食品の規制で世界をリードする米国FDA



この新政策は、「組換え植物を利用した食品の成分が既存の食品に含まれる物質と同一または同一とみなし得る場合は、FDAによる審査は不要」というもので、正にOECDの実質的同等の考え方そのものです。OECDのバイオ食品安全性部会の議長がヤング元FDA長官であり、会議では米国提案の実質的同等の概念に対して未だに仮想の議論をしてくるヨーロッパの環境派を向こうに廻し強烈な指導力を発揮したということであり、また、FAO/WHO専門家会議でもFDA食品安全性応用栄養センター前センター長であった現テキサス大学ミラー教授が議長をつとめたということを考えると、今回発表のバイオ政策は、農務省承認の野外試験も300件を越えたと報道されているように膨大な実験事実裏付けされた安全性の自信を背景にして策定され、OECD、WHOという国際舞台でお墨付きを得て米国内に逆輸入させたものと言えると思います。

ヨーロッパでもこのような米国のバイオ政策に対抗(?)し、ECにおけるバイオテクノロジーの競争力強化を目指して、EC委員会の中に「バイオテクノロジー調整委員会」を1991年3月に設置しています。EC委員会のバイオテクノロジー政策は、これまではDG11(環境)による2つの「EC指令」採択で厳しく規制していましたが、この新た

な調整委員会はDG1(対外)、DG3(域内市場・産業)、DG4(農業)、DG11(環境)、DG12(科学・研究開発)の5部局から成り調和のとれた政策を発展させるためのハイレベルの部局間調整委員会と位置づけられています。

同委員会は1991年4月にポジションペーパー「EC域内におけるバイオテクノロジーを基盤とした産業活動の競争環境の促進について」を発表しており、今後2つの「EC指令」の見直しも含め、バイオテクノロジー促進政策を展開してくるものと予測されます。

ILSI日本の貢献

WHOにおいて栗飯原副会長が招待発表し、その報告書が作成され、日本語版もバイオテクノロジーWGによって翻訳出版されたことは前述しましたが、バイオテクノロジーWGはその以前からバイオ食品の安全性評価の枠組み作りに大きな貢献を果たしているので、そのことにも触れておきたいと思えます。

ILSIとIBA(産業バイオテクノロジー協会)によって1988年に設立された国際食品バイオテクノロジー協会(IFBC)は、バイオ食品の開発が大幅に進む前に、適切な安全性評価基準に対するコンセンサスを

構築しておくことが望ましいという認識にたち、多数の専門家によって草稿された報告書を出版しています。この報告書は広く世界中の識者の意見も聴取し、国際シンポジウムの成果も踏まえてまとめられたものですが、バイオテクノロジーWGも種々コメントし報告書には東洋の伝統食品についての記載も取り入れられています。

FDAのバイオテクノロジー調整官マリアンスキー博士も本報告は米国でのバイオ規制を考える上で大変に参考になると述べたといわれたとのことで、最近の政府発表にも影響を与えていると思われま。

ILSIジャパンではこの報告書はバイオ食品の安全性を考えて行く上での基本的資料になると判断してWGメンバー全員で分担して翻訳し、建帛社より「バイオテクノロジーと食品」として出版しました。

おわりに

世界人口は毎年1億人増加しているそう  
で、2000年には64億人、2050年には1000億人になると予測されています。  
また、栄養不良人口は現在5.1億人にも及んでいるとのことであります。

このような現実を踏まえると、バイオテクノロジーを応用した食品をいかに健全に発展させるかは大変に重要な課題であることがわかります。バイオテクノロジーの応用については企業の利益のためだけではないのか、何か分からない恐ろしい技術なのではないかといった一般の人々の理解不足が依然として存在しています。また、有識者と言われる人たちにも科学の法則を無視した議論や科学的根拠のない懸念、倫理問題を持ち込んだ様々な議論が健全な発展を妨げている現実があります。

バイオテクノロジー研究委員会ではバイオ

テクノロジーの「有用性・安全性の理解」をより深めつつ、消費者の問題意識のポイントを探り、科学的事実に基づいた「消費者やオピニオンリーダーの啓蒙」と「行政への提言」を行い、バイオテクノロジーの健全な発展に寄与したいと考えています。



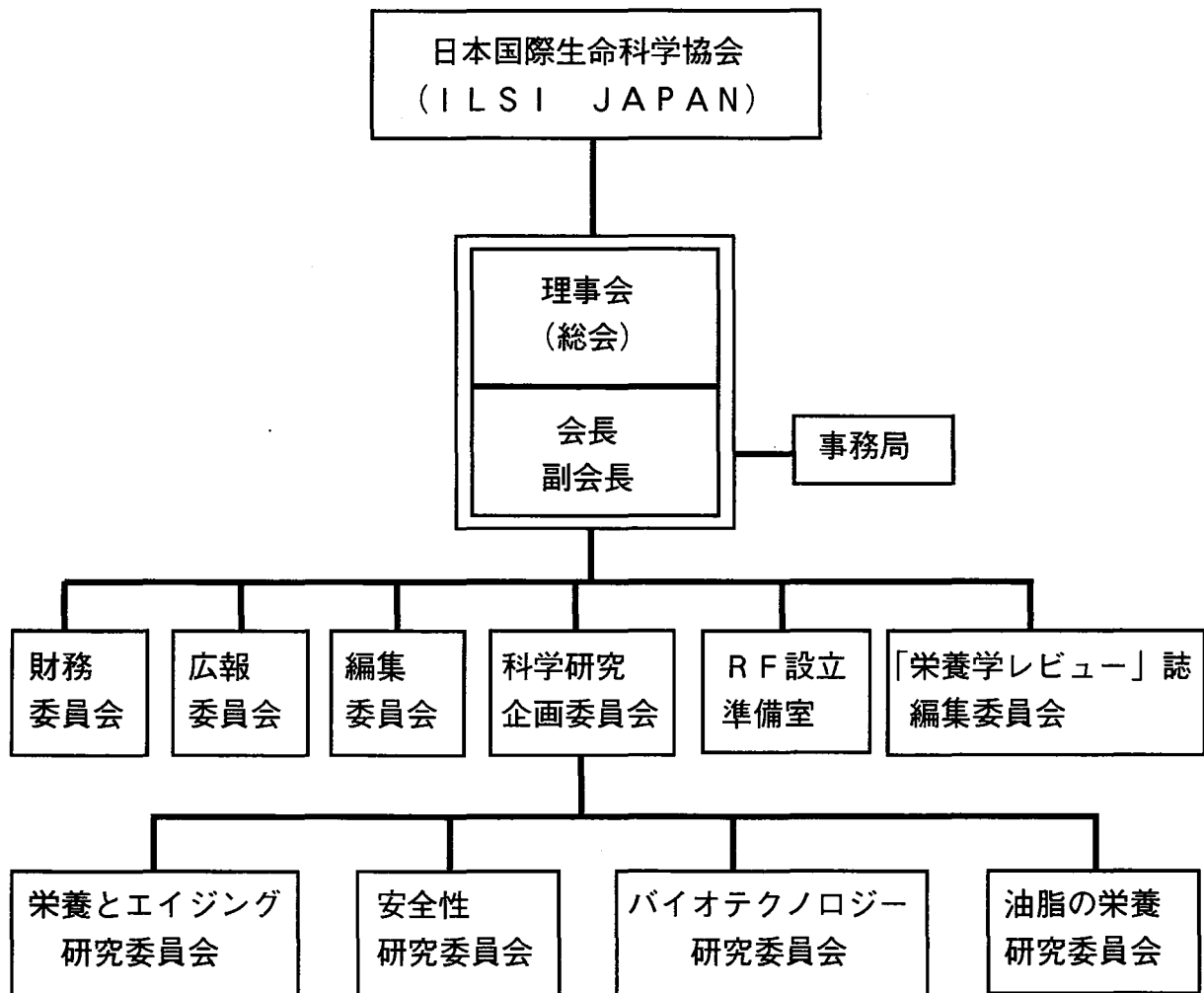
## 日本国際生命科学協会 委員会 活動報告

日本国際生命科学協会では、現在、下記の委員会が活動を進めております。「ILSI・イルシー」誌では、各委員会委員長のご協力を得て、本号より原則として、各委員会の活動報告を掲載することに致しました。

委員会活動、ひいては日本国際生命科学協会全体の活動に対する会員各位のご理解を一層深めて頂く参考にして頂ければと存じます。

尚、財務委員会及び前記事で活動の紹介のあったバイオテクノロジー研究委員会のメンバーは、各委員会活動報告の後に記載致しましたのでご参照下さい。

### 日本国際生命科学協会 委員会組織図



## 広報委員会 活動報告

委員長 秋山 孝

### 1. 広報委員会のメンバー

昨年度はILSI JAPAN設立10周年に当たり、故小原会長を先頭にして「栄養とエイジング」国際会議と十周年記念式典と講演会を成功裡に実施でき、何よりであった。

今年の3月5日の総会で、故小原会長の後任に角田会長が、また粟飯原、木村、小西、十河、戸上、山本の各先生方が副会長に、それぞれ選任され、ILSI JAPANは新体制の下でさらなる発展を目指すことになった。そして戸上副会長が広報担当役員に選ばれた。

これにともない、広報委員会としては次の方々に委員をお願いした。

青木真一郎（青木事務所）

秋山 孝（長谷川香料（株））

大沢ひで（味の素ゼネラルフーズ（株））

末木一夫（日本ロシュ（株））

野中 満（サントリー（株））

長尾精一（日清製粉（株））

丸山 孝（（株）ロッテ）

雛本恵子（日本コカ・コーラ（株））

尚、委員長は秋山委員、副委員長は青木委員。

### 2. 広報委員会の広報活動の将来計画

今後の広報活動をどのように行うかの基本問題をまず検討した。

広報の対象をどこにおくのか、また何を目的に行うか等で様々な活動が考えられる。I

LSIは産・官・学からなる点から、広報の対象としてこれらを、さらに一般の人々も追加することにした。産業界は会員と非会員の二つに分ける。次に広報の目的としては、ILSIを知ってもらう（認知）、ILSIの活動に参画、参加、協力してもらう、ILSIが提言する、ILSIの会員増をはかる等がある。

このようにして対象毎に目的を定め、それを達成する手段として機関誌、業界紙、一般誌、ILSI刊行物、ビデオ、ダイレクトメール、記者会の利用、広報誌などを選んだ。

一方ILSI JAPANは優先検討課題として、（1）会員が共有できるビジョンの策定、（2）法人化を含む組織構想の具体化、RF設立準備室、（3）栄養とエイジングをアンブレラとする事業活動、（4）財務強化（会員増等）対策があるので、前述の各対象毎の広報活動が（1）～（4）のどれに当たるかも検討し、（1）～（4）に役立つものと考えた。

7月2日に戸上副会長に上記の案を提出し、今後の広報活動について懇談した。席上戸上副会長から、アメリカでの経験、すなわち、こちらの考えをいかに相手に判ってもらえるかの工夫、進め方の事例を紹介され、広報活動の重要性の理解を求められた。そのためにはプロの活用も必要であろうとの考えも述べられた。広報委員会としてはこのようなことを認識し、考えた計画に基づく活動を進めて

いく。

### 3. 広報委員会の勉強会

我々はプロの方々と接触をはかり、ILSI会員の広報担当者による勉強会も行い、レベルの向上をはかり、広報活動を通じてILSIのお役に立ちたいと考えている。

### 4. 本年10月の全国食文化交流プラザ事業

本年10月に仙台でこの事業が行われ、10月25日(日)13時~17時はILSI JAPAN研究集会が予定されている。広報委員会はこのための準備を始めた。即ちポスター作成、当日配布する資料の用意、広報活動を行う対象の選出などがあるが、目的を達成するよう頑張る考えである。

## 編集委員会 活動報告

委員長 青木真一郎

I L S I J A P A N (日本国際生命科学協会)は創立直後の1981年11月に本会の(当時はI L S I等活動検討委員会)の機関誌として「食品とライフサイエンス」第1号を発刊して以来1991年までに29号を発行している。1991年はI L S I J A P A N創立十周年にあたり、10月には十周年事業として記念式典および「第一回栄養とエイジング」国際会議が開催された。1991年12月には本会創立者であり10年間本会の発展のために献身的なまた卓越した指導力を発揮された小原哲二郎前会長が逝去された。これらにより、1992年3月には小原先生追悼記念および十周年記念事業報告の特集として「食品とライフサイエンス30号」を発行した。

I L S I J A P A Nは創立十周年を経過して活動方針、組織、人事等が大幅に刷新され新しい体制で一層の発展をはかることになったが、機関誌「食品とライフサイエンス」もこれに伴い編集方針を若干変更し、以下のように新しい装いで発行することとした。

1. 誌名を「I L S I イルシー」と変更した。
2. 副題としてLife Science & Quality ofLifeとした。
3. 雑誌の大きさを従来のB5からA4に拡大した。
4. 表紙の色、デザインを一新し、表紙中央

にI L S I本部で決められたI L S Iのロゴ及び図形(アジア版)を入れた。

また本誌の内容としては従来の編集方針を継続する部分もあるが、概略次のような方針でのぞむこととした。

1. 従来から本協会機関誌は年4回発行の季刊とする方針であったが今後は発行予定を従来よりも厳密に守るよう努力をする。これによりI L S I J A P A Nの主要な活動の予告や報告も本誌でできるだけ迅速に行うようにしたい。速報性のあるニュース誌の発行は現在中断されているがこれの復活については広報委員会等と共に別に検討する。
2. 毎号の巻頭言は会長及び6人の副会長の回り持ちで執筆して頂くこととした。
3. 長い記事については執筆者にExecutiveSummaryをつけてもらう。これにより会員各社の多忙な経営者や科学技術敬意外の専門の方にもできるだけ内容を知ってもらう。
4. 必ずしも厳密な特集主義ではないがI L S Iの基本的な目標である健康、栄養、安全の主題から選んで各号の特色とする。
5. 本会の活動は主として事務局及び各委員会により行われているので編集委員会としては各委員会活動の現状を常に把握し重要な活

動については報告を受け本誌に掲載する。ILSI JAPAN主催の講演会、ワークショップ、セミナー等の報告は従来通り掲載する。

6. ILSI本部には研究財団(ILSI Research Foundation)や健康環境科学研究所(HESI)などの組織があり広範な科学的な活動を行っているので、これらについて本部から活動の現況に関する情報を受け適宜本誌に掲載する。

7. ILSIはNGOとして国連関係(中でもWHO, CODEX Alimentarius等)その他の国際的な活動に積極的に貢献しているので、NGOとしてのILSIの活動についても本部と連絡をとり適宜本誌に報告する。

8. 会員からの意見を積極的に歓迎し、寄せられたものの中で重要なものは本誌に掲載することとした。(ILSI JAPANの活動に関するもの、機関誌の内容等に関するものいずれについても)

尚、ILSI JAPANの認知度については会員会社内でさえまだ十分とは言えない現状であるので、広報委員会と協力して本誌の活用を推進したい。

新しい装いの「ILSI イルシー」は本年6月に従来の「食品とライフサイエンス」30号からの通し番号で31号として発行された。会員から非公式に寄せられた意見では、機関誌の新しいデザインと内容については概ね好評である。編集委員会としては各位のご意見を参考に機関誌の一層の充実を計って行きたい。

編集委員会 委員

青木 真一郎

日野 哲雄

桐村 二郎

福富 文武

大沢 満里子

<編集顧問>

橋本 重男(雙立印刷社長)

## 栄養とエイジング研究委員会 活動報告

委員長 大田賛行

栄養とエイジング研究委員会は1989年に「食と健康」「日本人の栄養」をまとめた健康グループ、栄養グループのワーキング・グループのメンバーをもとに更に新しいメンバーの加入をお願いし進めようとしている。

昨1991年10月に開催された第1回国際会議「栄養とエイジング」においては「エイジングのとらえ方」、エイジング過程における「免疫系と栄養」「消化管と栄養」「骨組織と栄養」「中枢神経系と栄養」などに関する総合レビュー、最近の研究動向や新しい知見が紹介され、内外に高い評価を受けた。多くのことが判れば判るほど、何が今なお不明かが明らかになってきたとも言える。この未解決な点の解明のためには基礎研究や調査により情報を収集し、解析すべき問題が山積している。もちろんその全てを我々が成し得るわけではないが、本研究委員会なればこそ分担して問題解決の一助たり得る分野があるのではなかろうか。

日本の長寿の科学的根拠では、長寿の原因としての栄養摂取の現状、栄養と食生活の改善に貢献している行政対策（保健所、栄養指導）や成人病に重要な関わりを持つ脂質代謝の遺伝学的検討にも最近の知見が紹介された。しかし、栄養と老化を論ずるには、栄養摂取状況のデータが充分かどうかが問題であり、長期データ、老人についてのデータ、個人別

のデータがないのが現状であり、これらの情報を収集することも本研究委員会が設置された理由の一つである。

新年度から活動を開始した研究企画委員会（4月21日）において、本研究委員会の研究分野が検討された。非常に重要な課題であるが、奥が深く簡単にまとまるものではないと言うことで、その場では結論が出ず継続討議となった。

6月12日の研究委員長会議で、栄養とエイジングに関し、東北大学の木村修一先生から「栄養とエイジングに関する今後取り組むべき課題」として次の諸点が教示された。

人間個体のエイジング：

(1) 生理機能のエイジング

イ) 消化吸収機構

ロ) 噛む（咀嚼）力の減退に付随する機能の調査

(2) 神経系統のエイジング

イ) 中枢系では痴呆症（アルツハイマー）

ロ) 末梢神経での匂い、味覚機能におけるエイジングによる劣化の男女別、地域別による差異の調査

(3) 病気とエイジング

イ) ガン（前立腺）

ロ) 腎臓と血液系のガン

ハ) 骨粗鬆症など

病気とエイジングの裏側に栄養の問

Report on Activities of  
Research Committee  
on Nutrition and Aging

YOSHIYUKI OTA  
Chairman of the Research Committee  
on Nutrition and Aging

題がある。

(4) 生体防御機能の変化

イ) エイジングと免疫の変化

ロ) 人間の成長過程と必要な食物

国民の高齢化が急速に進んでいる現在、世界一の長寿国である日本で栄養とエイジングに関する調査、研究を行うことの意義は深く、また責任も重い。健康な長寿生活を送る上で、栄養の果たす役割がたいへん重要であるにもかかわらず、まだ多くの未知の問題が残されている。新しい知見や未知の問題についても一つ一つ情報を集め検討し、整理し、その成果が学術的評価が高く、かつ参画諸社に対して直接的貢献をもたらすばかりでなく、ひいては広く社会的寄与が期待される水準の高いものとしたい。

1. 研究活動の具体的方法

(1) 栄養とエイジングについて取り組む課題の明確化

(2) シンポジウム、講演会の開催

①第2回全国食文化交流プラザ事業への参加

②その他

(3) ILSI JAPAN Nutrition & Aging研究財団創設への科学的基盤支援など

必要に応じてワーキング・グループを組織して更に掘り下げた活動をしたい。

2. スケジュール

1992年度末を目処に第1期研究活動期間とし、情報収集及びテーマの策定を実施

1992年10月25日(日)：第2回全国食文化交流プラザ事業

3. メンバー

担当 : 木村副会長(栄養とエイジング)  
栗飯原副会長(総括)

委員長 : 大田(雪印乳業)

副委員長: 向後(白鳥製菓)

川野(日本コカ・コーラ)

浜野(ファイザー)

八尋(雪印乳業)

メンバー: 今後テーマが決定次第テーマ別に応募したい。

4. その他

第2回全国食文化交流プラザ事業に関する企画書提出

全国食文化交流プラザ事業中央推進協議会が主催する第2回全国食文化交流プラザ事業に参加すべく、次の通り企画した。

日時: 1992年10月25日(日)

13~17時

場所: 仙台国際センター会議室

講師とテーマ:

座長 東北大学 木村修一先生

「栄養とエイジング」

講師 沖縄県副知事 尚弘子先生

「沖縄の長寿をもたらす食生活の秘訣」

東京都老人研 柴田博先生

「日本人の食生活」

筑波大学 鈴木正成先生

「食事と運動」

講演とパネルディスカッションのスケジュールと講演の目的などについて企画書を作成し全国食文化交流プラザ事業に日本国際生命科学協会会長の名のもとに6月15日に申請書とともに提出した。

## 安全性研究委員会 活動報告

委員長 大下 克典

安全性研究委員会はその具体的な活動計画案を検討中の段階であり、安全性科学研究活動始動の第1ステップとして研究活動骨子をまとめるため次のような会合を持った。

『第1回安全性研究委員会活動計画案検討会』

1. 日時：92年7月20日（月）13:00～16:30
2. 場所：ILSI JAPAN 事務所 会議室
3. メンバー（敬称略、順不同）：

粟飯原景昭 副会長

天野健次（キリンビール）

諏訪芳秀（サントリー）

萩原定彦（味の素）

浅居良輝（雪印乳業）

大下克典（キッコーマン）

桐村二郎 事務局長

福富文武 事務局次長

（会員企業のメンバーはそれぞれ安全性関係の現場で活躍されている方々）

この会の中で、“食品が無害であることは安全性の必要条件であっても充分条件ではない。食品は無害であると同時に有益でなければならない。食品は複雑な多成分系である。多成分系の活性（安全性、有効性）は単一成分の活性の総和ではない。”など、とかく総論的、概念的、哲学的な話になりがちな「食品の安全性」について、ILSIの独自性・自主性を念頭に置き「自分達は何がやりたいのか」「自分達は何ができるのか」「ゴール

はどこに引けばよいのか」など、時には生々しく、泥臭く、懸命に議論した。

そして、第1ステップの結論として到達したことは、『加工食品の安全性保証』について研究・開発から製造、流通の段階に到るまで、それぞれの段階で必要とされる項目を抽出・整理し、具体的な問題点を明らかにするということである。この中から本活動の攻略点を見だし、各論としての「食品の安全性」評価・保証の例をまとめたいと考えている。

「安全性」科学研究活動は牛歩をしていますが、できるだけ具体的な内容に心掛け、最終的に社会の役に立つゴールを目指して進めて行く所存です。今後、研究活動計画骨子を提示して委員会の編成を進める予定ですので、会員の皆様のご参加、ご協力をお願いします。



## 油脂の栄養研究委員会 活動報告

委員長 日野哲雄

91年秋に「油脂の栄養と健康」ワーキング・グループの成果報告を約5年かかってまとめ刊行することが出来た。業界や各大学の方々からの反響も多く、折柄エイジングの国際会議に参加された外国からの参会者からも評価を得た。

しかし脂質関連の生化学は数年来大きな曲がり角にさしかかり、脂肪酸の栄養評価も年々新しくなりつつあって、この報告にも一部改定の必要が生じた書き残された魚油及びパーム油の分野についての記述の追加が痛感されていた。

新年度から開始された研究企画委員会（4月21日）における総括的討議の中で、油脂と脂肪酸の栄養問題の整理と提案こそ日本から世界へ発信出来る情報ではないかとの提案があった。それを受けて、「魚介類脂質の栄養」・「パーム油脂関連の栄養」・「畜産脂質の栄養」をテーマにして本栄養研究委員会を発足することが決定された。

ILSI本部の Nutrition Reviewsでは、脂質栄養の特集号として第50号記念号を飾っている。日本では1月23日に「植物油と健康シンポジウム」が開催され、5月22日には「n-3脂肪酸の生理機能とその応用」という研究会が開催されたほか、関連学会でも多くの食用油脂関連演題が出され、この分野に関心を持たれる方々が増えていることは確かである。

油脂の栄養研究委員会では、関係理事会社（大洋漁業・不二製油・日清製油・味の素・雪印乳業）のご協力と会長・副会長・事務局長の方々の激励を受け、数回の準備会を開いた後第1回の会合を6月3日に開き委員会メンバー、担当テーマを決め、具体的な内容について活発な討論に入った。

### ◎委員メンバー <○印委員長>

野中道夫（理事：大洋漁業）  
木村省二（大洋漁業）  
岡崎 秀（大洋漁業）  
森田雄平（理事：不二製油）  
橋本征雄（不二製油）  
渡辺 寿（日清製油）  
八尋政利（雪印乳業）  
高橋 強（東京農業大学）  
新免芳史（サントリー）  
麓 大三（ILSI JAPAN）

○日野哲雄（東洋製油）

### ◎テーマと担当

1. 魚介類脂質の栄養（野中、木村、岡崎）
2. パーム油脂関連の栄養（森田、渡辺、橋本）
3. 畜産関連脂質の栄養（高橋、八尋）

このうち「魚介類脂質の栄養」に関しては、

Report on Activities of  
Research Committee  
on Nutrition of Fats and Oils

TETSUO HINO  
Chairman of the Research Committee  
on Nutrition of Fats and Oils

次のような目次案が提出され、範囲や内容とともに学識経験者からアドバイスを受けるという意向であった。魚介類の脂質は他の油脂と違って魚油単独で摂取することは少なく、魚介として摂取するから他の栄養素と関連して論ずる必要があるなどの討論がなされた。

魚介類脂質の栄養（目次案）

1. 概説：魚介類脂質の注目され始めた背景、今後の方向性など
2. 魚介類の構成栄養成分・脂肪酸の種類と性状
3. 魚介類種による脂質含量、脂肪酸組成比較
4. 脂肪酸の消化吸収・代謝
5. 脂肪酸の生理作用
  - ①血管拡張作用
  - ②血小板凝集抑制作用・血液凝固メカニズム
  - ③血圧低下作用
  - ④血中中性脂肪低下作用
  - ⑤血液粘度の低下作用
  - ⑥HDL-CLの増加、VLDL-、LDL-CLの低下作用
  - ⑦心筋梗塞防止作用
  - ⑧脳梗塞防止作用
  - ⑨脳機能改善作用
  - ⑩魚油および脂肪酸の必要量
  - ⑪抗腫瘍作用
  - ⑫その他
6. 魚油の変敗・その防止：抗酸化剤
7. 魚油の製造・精製方法
  - ①原料の選択
  - ②採油と精製方法
8. 魚油の利用
  - ①硬化油
  - ②塗料
  - ③潤滑油
  - ④化粧品
  - ⑤健康食品・医薬品

⑥その他

9. 魚介類及びその油の生産及び摂取状況
10. その他の魚介類脂質の栄養
  - ①スクワレン
  - ②グリセルエーテル
  - ③その他

各委員共 Nutrition Reviewsの油脂栄養特集号を始め、新しい文献を熟読し、意見の交換を行って、共通の立場で議論を深めてゆくつもりであり、各方面からの新情報をお願いしたい。7月29日には第2回の会合を持ちこれらの討論を深めつつある。

## R F 設立準備室 活動報告

日本国際生命科学協会  
事務局次長 福富文武

本協会の法人化についての研究は、協会設立以来、折に触れて進められてきた。ILSI本部の定款においても、ILSIの全ての組織は公益法人であることを原則としており、本部並びに日本以外の支部は、すべてそれぞれの設立地域での公益法人の資格を得ている。

一方、日本においても、本協会設立の目的から、産・官・学の協調を推進する上で、公益法人化が望ましいとの内・外からの声も高まっている。

このような背景のもとで、本協会の日本における法人化の最も望ましいあり方について、旧称「将来展望委員会」及び役員会において検討が行われてきたおり、昨年十周年記念式典において、小原前会長は、「…本協会が量的かつ質的に大きく飛躍する時期にきた。出来得れば、本協会が非営利の科学団体として、本部のような法人化と研究基金の設置を早い時期に実現できるよう一層の努力を重ねることを希っている。…」と述べられている。

一方、ILSI本部の研究財団に対しては、これまで十数社に及ぶ日本企業からの基金提供が始まり、その中で、本協会が公益法人もしくは研究財団であって欲しいとの声も出されている。

また、角田会長と関係官庁との懇談の中でも、法人化が話題となり、可能性についての助言も得られている。

以上のような背景をふまえて、本年度総会

において、研究財団を含む法人化の研究を進めるための「RF設立準備室」の設置が承認され、戸上副会長が総括し、福富事務局次長がコーディネーションを行うこととなった。

「RF設立準備室」では、日本における本協会のベストな法人化のあり方について、様々な観点で研究をするため、長嶋&大野法律事務所の助言を得、また関係官庁、法人設立経験者等の助言を得ながら、基本的な考えをまとめつつある。

この間、ILSI本部のマラスピーナ会長から、日本における法人化は、望ましいことであり、その一環としてILSI研究財団に属する研究機関としての「エイジング研究所 (Institute of Aging) を日本に置き、昨年開催した第一回「栄養とエイジング国際会議」のフォローアップを期待するとの構想も述べられている。

以上の経過をふまえて、本協会に関わる法人化の問題は以下の事項について研究を進め、方向づけを明確にしていきたい。

1. 国際機関ILSIの日本支部としての本協会の法人化は、日本国内でどうあるべきか？
2. 本協会の国際性を、国内における公益性とどう整合させるか？
3. 本協会をILSI日本支部として公益法人とするか？
4. 本協会は従来通り任意の非営利科学団体

とし、研究基金を以て研究財団の形で法人化させるか？

5. ILSI本部研究財団の日本における法人とするか？
6. 本協会と研究基金を含めた総合的な法人とするか？ 等

以上の研究の中で、本協会における法人化の基本構想をまとめ、役員会、総会、本部等の確認をとりながら具体的な対応に取り組んで行きたい。

## 「栄養学レビュー」誌編集委員会 報告

日本国際生命科学協会  
事務局次長 福富文武

栄養学の分野では世界随一の scientific journalである "Nutrition Reviews"誌は、米国栄養財団から創刊され、本年はその50巻を迎える記念の年でもある。

米国栄養財団はその後 ILSI と合併したため、現在の刊行は ILSI 北米支部から行われ、実際には Springer International社を通じ、全世界およそ5,000の購読者に最新の情報を提供し、栄養学ならびに関連領域の発展に多大の寄与をしている。

本誌の50巻記念を契機に、ILSI本部から本協会に、その日本語版の刊行を考えてはどうかとの勧めがあり、その可能性を関係各位と検討を重ねてきた結果、かつて本協会が建帛社とともに「最新栄養学」(Nutrition Reviews誌を補完するため、米国栄養財団から出版された "Present Knowledge in Nutrition" の日本語版で、第5版が1987年、第6版が1991年に出版されている)を刊行してきたこと、本協会が昨年主催した『栄養とエイジング』国際会議の講演録が Nutrition Reviews誌の増刊号で刊行予定であること、内容が日本の研究者にとって極めて意義があること等を鑑みて、本年の第50巻から、日本語版の刊行を進めることに決定された。

ILSI本部ならびに北米支部からは、本誌の著作権を無償で本協会に提供し、さらに日本のオリジナル記事の収載も可能との非常に好意的な条件が供与された。さらに建帛社からは日本語版の出版を請負うとの受諾があり、日本語版刊行に向けての編集委員会が編成さ

れ、本年2月から準備が始められた。

日本語版刊行の概要は次の通りである。

誌名：「栄養学レビュー」

Nutrition Reviews 日本語版

刊行： ILSI JAPAN

出版：(株)建帛社

編集委員：木村 修一 博士…編集長

(東北大学農学部長)

小林 修平 博士

(国立健康栄養研究所長)

五十嵐 脩 博士

(お茶の水女子大学教授)

井上 修二 博士

(横浜市立大学医学部助教授)

なお、本協会からは編集協力で桐村事務局長、福富事務局次長が参加。

出版頻度：当面は、四半期ごとを目標とするが、将来は原誌に準じて月刊となるよう努力する。

内容：原誌の記事中、日本の読者に関心の強いものを優先し、少なくとも原誌の二分の一以上の記事について完訳する。採用されなかった記事については、標題、著者、アブストラクトを日本語として掲載する。また、日本独自の記事及び統計、情報も掲載する。

日本語版第1号については、目下、翻訳を完了し、校正の段階にあるが、ILSI本部、北米支部との正式な契約を待って、今秋刊行されることになっている。

### 財務委員会名簿

- 委員長 : 大田 賛行 (雪印乳業 (株))  
メンバー: 入江 義人 (三栄化学工業 (株))  
向後新四郎 (白鳥製薬 (株))  
山崎 昌男 (山崎製パン (株))

### バイオテクノロジー研究委員会名簿

- 委員長 : 倉沢 璋伍 (味の素 (株))  
副委員長: 岩崎 泰介 (雪印乳業 (株))  
高野 俊明 (カルピス食品工業 (株))  
メンバー: 安藤 進 (山崎製パン (株))  
井上 健夫 (三栄化学工業 (株))  
氏家 邦夫 (森永乳業 (株))  
梅木陽一郎 (三菱化成食品 (株))  
大熊 浩 ((株) ロッテ 中央研究所)  
岡田 孝宏 (リノール油脂 (株))  
尾崎 洋 ((株) ヤクルト本社)  
柿谷 均 (東ソー (株))  
川崎 正人 (キリンビール (株))  
喜多村 誠 (ハウス食品工業 (株))  
黒島 敏方 (ライオン (株))  
小林 忠五 (昭和産業 (株))  
牛腸 忍 (長谷川香料 (株))  
柴野 裕次 (サントリー (株))  
清水 健一 (協和発酵工業 (株))  
高田 祐子 (日本リーバB. V.)  
立場 秀樹 (小川香料 (株))  
野崎 倫生 (高砂香料工業 (株))  
浜野 光年 (キッコーマン (株))  
久田 洋二 (鐘淵化学工業 (株))  
町田千恵子 (ネスル日本 (株))  
大和谷和彦 (大日本製薬 (株))

## NGOとしてのILSIの国際的な貢献

日本国際生命科学協会  
編集委員会

ILSIは、その先見性ある企画力、行動力ならびに栄養・安全・健康に関わる多くの専門分野における智力をもって、国レベル、地域レベルならびに国際レベルの諸機関の様々な計画に参画し、協力してきた。

その活動の成果は、各国政府機関、ヨーロッパ共同体に加え、国連等の国際機関からも認知され、国連の世界保健機関（WHO）からは非政府組織（Non Governmental Organization：NGO）として、また国連食糧農業機関（FAO）からは特別諮問組織（Specialized Consultative Status：SCS）として、特別の組織としての位置づけを得ている。

これに呼応して、ILSIでは、FAO/WHO Coordinating Committeeを編成し、協力体制を敷き、さらにジュネーブのWHO内にILSI事務所を設置し、そこでR. ブジーナ博士が活躍している。

ILSIは、古くから、FAO/WHO合同食品規格計画（Joint FAO/WHO Food Standards Programme）に代表を送り、国際的な科学団体としての意見やコメントを提供している。

ここ近年は、特に、国連が地球規模で取り組み始めた二つのビッグ・プロジェクトにも参画している。

### 1) 地球サミット

6月にブラジルで開催された、いわゆる地球サミット（環境と開発に関する国連会議、

United Nations Conference on Environment and Development：UNCED）には、代表が参加し、企画及び行動計画（ASCEND21）の作成に協力してきた。また、来年末に予定されている、フォローアップのためのフォーラムにも参加を予定している。

### 2) 国際栄養会議

21世紀に向けての食糧ならびに栄養政策を検討するためのFAO/WHO国際栄養会議（International Conference on Nutrition：ICN）の企画及び科学ドキュメントの作成に参加し、協力してきた。特に1991年9月にマレーシアで開催されたアジア栄養会議においては、アジア地区のコーディネーション会議やILSI-WHOシンポジウムを共催し、アジアの各地域の栄養、ICN関係機関に協力した。

安全性に関わる国際的な計画の中では、特にWHO等が進めてきた国際化学物質安全計画（International Program on Chemical Safety：IPCS）及びWHOの国際がん研究センター（the International Agency for Research on Cancer：IARC）に対しても、側面からの協力・支援体制を続けている。

以上の内、国際栄養会議については、本協会がこれから本格的に取り組もうとしているエイジングとの関わり、また私達個人の身近な問題としても関心が高い。

ここでは、ILSI-WHO事務所のR.

ブジーナ博士から送られてくる報告を中心に、国際栄養会議の準備経緯を紹介し、さらに本会議の公式決議となる世界栄養宣言（World Declaration on Nutrition）及びその行動計画（Plan of Action）の草案を入手したので、その要点をまとめた。

表 1：国際栄養会議準備スケジュール

1991年

- 6. 3- 4 第1回 Mtg of Advisory Group of Experts
- 6.24-26 Steering Committee Mtg
- 10.21-23 Steering Committee Mtg
- 11. 7- 9 Mtg of the Authors of the Theme Papers/ロ-マ
- 12. 9-11 Steering Committee Mtg

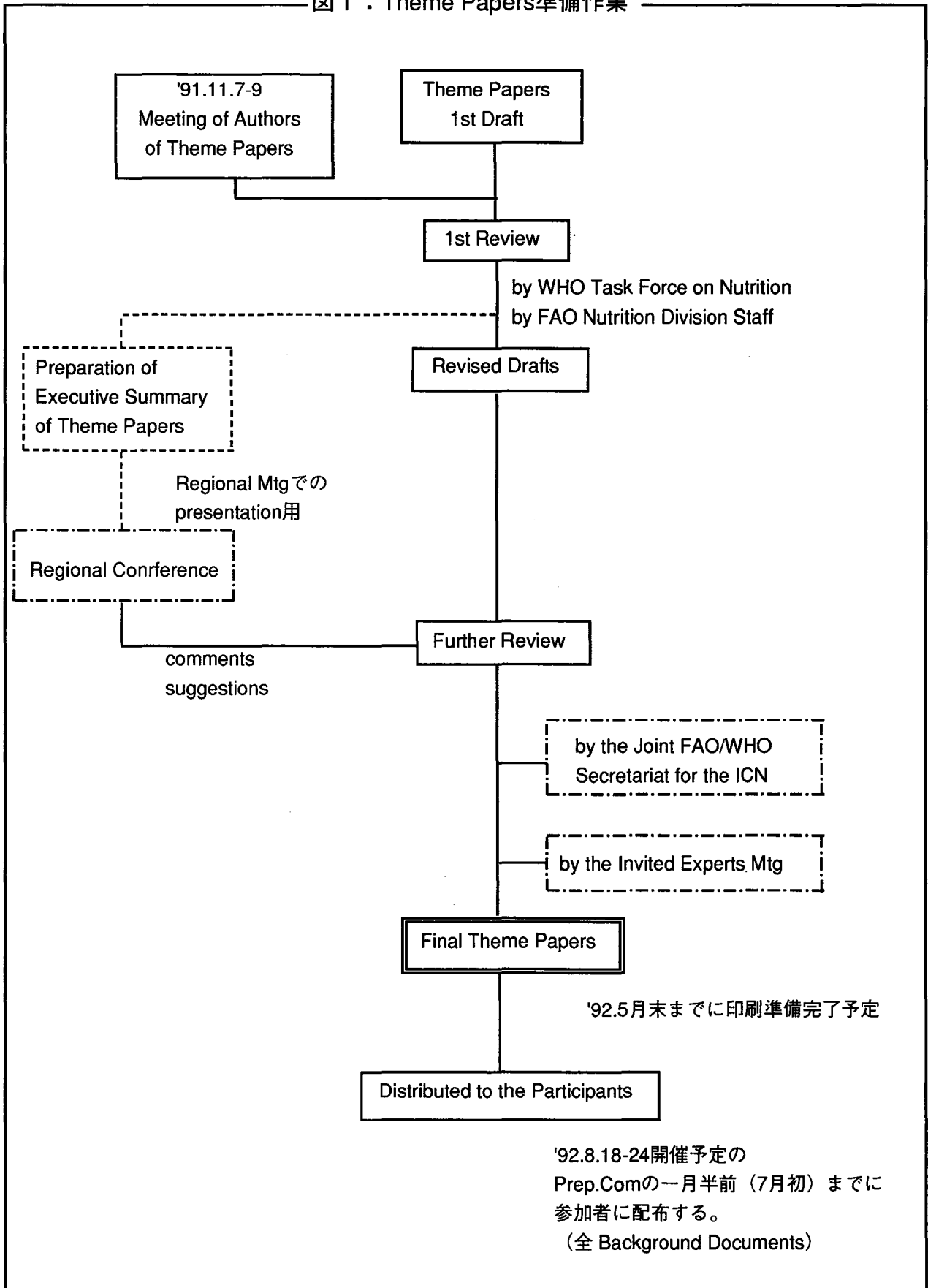
1992年

- 1.27-31 FAO/WHO Regional Mtg/アジア・環太平洋/バンコク(タイ)
- 2.24-28 FAO/WHO Regional Mtg/仏語圏アフリカ/ダカール(セネガル)
- 3. 2- 4 第2回 Mtg of Advisory Group of Experts
- 3. 5- 6 Steering Committee Mtg
- 3.16-20 FAO/WHO Regional Mtg/ラテン・アメリカ/メキシコ・シティ(メキシコ)
- 3.16-20 FAO/WHO Regional Mtg/東アフリカ/ナイロビ(ケニア)
- 3.24-27 FAO/WHO Regional Mtg/カリブ諸国/キングストン(ジャマイカ)
- 4. 1- 4 FAO/WHO Regional Mtg/中・東欧/ナトウ(チェコスロバキア)
- 4. 6- 9 WHO European Conference (Regional Mtg/西欧, 米, OECD  
/コペンハーゲン(デンマーク))
- 4. 6-10 FAO/WHO Mtg/ロ-マ
- 4.12-16 FAO/WHO Regional Mtg/極東/カイロ(エジプト)
- 5月初め FAO WHO ACC/SCN Mtg/ロ-マ
- 5.11-15 Mtg of the Joint FAO/WHO Secretariat/ジュネーブ(スイス)
- 6.24 Mtg of NGO
- 8.17-18 pre-PrepCom Mtg of Int'l NGO's
- 8.18-24 Preparatory Committee (PrepCom) Mtg/ジュネーブ(スイス)

1992.12. 5- 9 International Conference on Nutrition



図1 : Theme Papers準備作業



<国際栄養会議の準備経緯>

国際栄養会議は表1に示したスケジュールで準備が進められている。

全体の準備と平行して、各国では中心となって準備を進める Focal Point(s)を選び、国際栄養会議関連の全活動の調整、各国別アセスメント・ペーパー準備の調整、Regional Meetingに参加する際の準備・調整、外部協力機関の評価及び確保などを行ってきた。日本では、小林修平国立健康栄養研究所長（厚生省）と梅田圭司食品総合研究所長（農林水産省）がFocal Point(s)に推挙されている。

この Focal Point(s)設定の前に編成された Advisory Group of Experts for ICN (AGE) は、FAOとWHOの事務総長に対し、Joint FAO/WHO Steering Committeeを通じて本会議に関する諸事項やテーマ、バックグラウンド・ペーパーの科学/技術面について、科学的指標を示し、助言を与えることであり、また各国のFocal Point(s)がまとめる文書や、NGOなどから寄せられる文書の評価を行う役割を持つ。日本からもこの Advisory Groupに小島康平博士（麻布大学教授）と家森幸男博士（国立島根医科大学教授）が参加されている。

国際栄養会議のために用意されているバックグラウンド・ペーパーには、世界レベルでまとめたテーマ・ペーパー、ケース・スタディー、グローバル・アセスメント・ペーパーと、各国レベルでまとめたカントリー・ペーパーがある。

一例として、テーマ・ペーパーがどのような経緯で準備されてきたかを図1に示した。テーマ・ペーパーは次の8報であり、ILSI本部からもテーマ・ペーパー作成準備段階で5), 6)を初めとする6つのテーマについて、コメントを提出している。

- 1) Improving Household Food Security
- 2) Protecting Consumers through Improved Food Quality and Food Safety
- 3) Caring for the Socio-Economically Deprived and Nutritionally Vulnerable
- 4) Preventing and Managing Infectious Disease
- 5) Promoting Appropriate Diets and Healthy Lifestyles
- 6) Preventing Specific Micronutrient Deficiencies
- 7) Assessing, Analysing and Monitoring Nutrition Situations
- 8) Incorporating Nutrition Considerations into Development Programmes and Policies

ケース・スタディーは栄養に関する事項の内、一般の理解が事実とかけ離れているものについて情報を提供する目的で準備されたもので、ILSI本部からはその中の1報 "Economic impact resulting from development of food processing facility in a LDC" に対してコメントを提出した。

Dr. Richard Longhurstが著した、"Global Assessment and Analysis of Current Problems and Trends in Nutrition"、すなわち、グローバル・アセスメント・ペーパーには、国際栄養会議の公式決議となる世界栄養宣言及び行動計画の基になる、参考資料という意味合いがある。ILSIではブジーナ博士が著者に協力してきたが、本資料も既に完成した。

各国レベルで用意しているカントリー・ペーパーについては、カナダ、デンマーク、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、ノルウェー、スウェーデン、スイス、タイ、トルコ、イギリス、アメリカなどから提出されている。

また、世界/各国レベルで準備したバックグラウンド・ペーパーの内容を行動計画に反

映させるために、表1にあるように各地域毎の会議を開催した。

今後、本会議の前の準備会議として、8月18日～24日、ジュネーブにおいて Preparatory Committee (PrepCom) Meetingが開催される予定で、その出席者数は500～1,000名と見込まれ、全体会議の他に3つのワーキング・グループ・ミーティングが行われる。このPrepComでは、世界栄養宣言と行動計画の草稿が討議される。

ILSIをはじめ、NGOは本会議にはオブザーバーとしての参加が認められているが、各国レベルでの準備活動には協力が求められ、また各国の代表などのスポークス・パーソンを通じて、あるいは文書を提出することで意見の表明が出来る。PrepComに先立ち、NGOによる pre-PrepCom Meetingの開催が予定されている。

#### <世界栄養宣言とその行動計画>

##### ◇世界栄養宣言

###### (World Declaration of Nutrition)

世界栄養宣言の草稿によれば、国際栄養会議の決議として、『平和かつ安全な環境に恵まれた世界において、すべての人々に十分な栄養を供給できるよう、共に努力してゆこうという公約を宣言する』ものと思われる。以下、この草稿の要点を抜粋・要約する。

###### (世界栄養宣言／草稿の要点)

先進国では、過剰な食物摂取あるいは偏った食物摂取により、慢性疾患を引き起こしたり悪化させている人々が何億人もいる一方で、発展途上国では世界総人口の20%に当たる7億8千万以上もの人が十分に生産的な生活を送るのに最低毎日必要なだけの食糧を、未だ

に十分確保できていないという実状を重くみて、西暦2000年に向けて極端な飢餓や栄養失調の根絶を含む以下の状況を解決するために力を尽くす。

- ・飢饉による飢餓、餓死
- ・広範囲に亘る慢性的飢餓
- ・重篤なたんぱくエネルギーの栄養失調、とりわけ子供の場合
- ・母胎の栄養失調とそれに伴う新生児低体重
- ・ヨウ素欠乏性疾患、ビタミンA欠乏、鉄欠乏性貧血
- ・最適な授乳に障害となるもの
- ・主要栄養素の障害

飢餓や栄養失調の根本的原因は貧困であると考えられる。貧困を根絶し、すべての人々により良い栄養状態を保証するためには、平等な発展の達成、社会的正義の保証、弱者層の福利の保護・向上をはかる政策を採用しなければならない。社会的・経済的不均衡の継続、農業やその他の社会事業に対する予算の割当が不十分であったり、あるいは削減された場合、戦争や飢饉などが、十分な栄養状態の確保を目指す上で主要な障害となっていることはわかる。しかし、その進歩の歩みがのろいのは、栄養失調の根元的な原因を克服するのに必要な理解や資金の投入が不十分であったためでもあり、また、栄養上の問題に取り組む制度の制定、強化が各国で長い間行われてこなかった影響もある。

自国民の栄養状態の向上は各国の最優先の義務ではあるが、低所得諸国の努力に対しては世界全体の援助が必要である。

更に、食品に関連した非伝染性疾患を防ぐため、包括的な方法の開発を誓約する。

また、以下の目的のために行動計画を採択し、国際機関、多国あるいは二カ国から成る機関、援助機関、各国政府、私的団体、NG

0、地域社会、個人といった、さまざまなレベルで次々に、行動計画を実行していく旨を公約する。

- ・すべての人々が十分かつ安全な食糧供給及びヘルスケアを受けられるよう保証する。
- ・平等な進歩を促進する。そのために、満足できる栄養状態というものを人類の発展及び経済の発展を促進する活動の重要な指針として、また同時に進歩を監視する重要な指標として用いる。
- ・自分も満足できる栄養状態を自分で確保できるように、物資や機会ばかりでなく、食品関連の非伝染性疾患を予防する政策やプログラムなどの情報や教育も得られるよう保証する。

1994年末までに、行動計画に述べられている方針やプログラムに沿って各国の政策や活動を改定、あるいは準備する。飢餓と栄養失調を根絶して満足な栄養状態を確保するという目標を達成する上で、政策や活動を実行し、進歩を監視するため、個人レベル及び集団レベルでの十分な能力開発を行う。

#### ◇行動計画 (Plan of Action) 案の概要

国際栄養会議で採択される「世界栄養宣言」の目的を達成するために、各国政府、非政府組織、民間団体、地域社会、国際社会に対する指針とするために行動計画 (案) が作成された。

この行動計画は I C N での集中的な討議の結果による、政策、プログラムおよび行動に関する提案を含むものである。また現実的な基礎に基づき、適切な栄養状態を達成するため追及しなければならない問題の多くの側面について、世界中の専門家の広範な意見を提示するものでもある。従って、この行動計画は現在までの作業の上に作られ今後の国の栄養改善計画の作成と実施に主要なステップを示すものである。

さらに一貫した効果的な計画の作成が不可欠であるが、各国、各地域の現状は大きく異なるので、それぞれの国が1994年末までに独自の行動計画を作成する必要がある。

#### 重要な目的

- ・世界中のすべての人々に対する、栄養が適切で安全な食糧の十分な供給のための、継続的な手段の保証
- ・世界中のすべての人々の、健康と栄養的な福祉を達成し、維持すること
- ・持続性のある、環境的に健全でかつ栄養と健康の改善に貢献する開発目標の達成

#### 主要な政策指針

- ・栄養福祉を振興するための公約  
それぞれの国はその開発計画の構成部分として国民の栄養的福祉の振興の目的を達成する政策的公約をするべきである。
- ・環境的に健全で持続性のある開発を行うために適切な食糧の供給、バランスのとれた食事、健康に対する注意および教育が行われなければならない。
- ・もっとも傷つきやすいグループ (貧困家庭の乳幼児、妊婦、乳児の母親) に対する優先  
これらの人々は栄養的にもっとも弱いので、優先的にその保護と栄養福祉の増進をはからなければならない。
- ・公正な発展  
経済の発展と、すべての階層の人々への公正な恩恵が実現されるべきである。
- ・人々の参加  
食糧および栄養改善計画の達成には社会全体の参加が不可欠である。特に貧困階層の人々には自分達に関係のある決定や行動への参加を奨励するべきである。
- ・女性に焦点を絞る  
女性は家庭における主たる食事、世話、栄養情報の提供者であるので、栄養福祉

目標の達成のための役割と責任を増大させなければならない。

・人資源の開発

栄養福祉は人々が完全に知的、身体的な可能性を達成するための必須条件である。従って、食品供給、健康、教育と社会サービス、適当な数の人の訓練による人材開発を示唆している。

・適切な資源の配分

栄養福祉の目的を達成するためには計画実施のために財政、技術両面の資源が必要である。従って各国は、この目的に必要な資源を配分するために最善の努力をしなければならない。

発展途上国では計画によってはその能力を越えることが考えられるので、国際機関などはこの線に添う各国の努力を支持するべきである。

平行する問題

- 政府、地域社会、民間の基盤構造の強化
- 個人、家族、地域社会レベルでの教育制度、社会情報伝達メカニズムの強化
- マスメディアの利用
- 食品、健康、教育に関するより良い継続的な栄養調査、監視システムの創造
- 特定された問題についての適切な栄養学的研究と効果的な介入の強化
- 農業、健康、栄養および教育の分野での広範な訓練の実施

戦略と行動

栄養福祉の目的は、様々な部門の責任を含む政策の組み合わせによってのみ達成できる。ICN会議に基づき、各国政府の取るべき行動は以下の8つのテーマに分けられる。

1. 栄養目標、栄養に対する考慮、構成要素の開発計画への取り込み
2. 家庭への安定的食料供給の保証（国の食糧供給政策に関連して）

3. 食糧の質と安全性の改善を通じての消費者保護

4. 伝染病の予防と管理

5. 社会経済的な弱者と栄養的に傷つきやすい人に対する保護

6. 特定の微量栄養素欠乏の予防

7. 適切な食事と健康的なライフスタイルの促進

8. 栄養状態の評価、分析、継続的監視

行動に対する責任

1)国のレベル

行動計画の提案はそれぞれの国の現実に照らして優先的行動に移し変えられなければならない。各国政府は従って、優先行動を確立し、時間的な枠を設定し、必要とする資源、また現在既にあるものをはっきりさせるべきである。

2)国際的なレベル

国際機関—多国間、二国間、及び非政府組織—は、ICNの宣言と行動計画に決められた目標と戦略の達成にどのように貢献できるかについて早急に検討する。

FAOとWHOの決定機関は1993年、提案された行動の活発な実施を保証するため、その栄養計画を強化する手段を考慮する。地域的な機関は、宣言と行動計画に対する検討をそれぞれの会議の討議項目に含めることが求められ、また地域的な研究及び訓練機関は、この行動計画の実施と各国間の協力に必要な人材の開発を育成するための協力体制を確立または強化する。

関連する国連の組織は、この行動計画の目標達成に国際的、地域的、国及び地域レベルで参加するための協力メカニズムを強化する。FAOとWHOはメンバー各国及び関係ある国連の組織と緊密な連絡をとり、ICN宣言及び行動計画の実施に関する定期的な報告書を作成する。

ICN会議の至急で短期的なフォローアップ  
に対する勧告

各国政府は関連する省庁とICN Focal Point (s)と栄養状態の改善の作業を促進する。1994年未までに、すべての関係省庁、地方自治体、非政府組織および民間組織の積極的な参加によりこの行動計画宣言の原則とプログラムに基づく国の計画を作成する。

進行と達成についての報告書を発行する。

結論として、ICNは飢餓と特に開発途上国での栄養不良を排除するための継続的なプロセスの一步として理解されるべきである。

**会員の異動**

理事の交代 (敬称略)

<u>交代年月</u>	<u>組 織 名</u>	<u>新</u>	<u>旧</u>
1992.5	サントリー (株)	研究企画部長 東 直樹	研究企画部長 古賀 邦正
1992.6	鐘淵化学工業 (株)	取締役食品事業部長 早川 和雄	取締役食品事業部長 藤原 剛
1992.6	東ソー (株)	東京研究センター 生物学研究所長 金井 晃	アスパルテーム部長 鶴田 大空
1992.7	糖質事業開発協議会	運営委員長 戸塚 陽信	運営委員長 塚越 弘
1992.8	大和製缶 (株)	常務取締役 小林 茂夫	専務取締役 岡田 寿夫
1992.8	山之内製薬 (株)	健康科学研究所長 林 利樹	健康科学研究所顧問 西村 博

日本国際生命科学協会活動日誌

(1992年4月1日～7月31日)

4月8日	編集委員会	(ILSI JAPAN)
4月13～14日	ILSIシンポジウム 〔環境化学物質のヒトがん 発生に対するリスク評価〕	(石垣記念ホール)
4月14日	役員会	(ANA東京ホテル)
4月16～17日	ILSIシンポジウム 〔環境化学物質のヒトがん 発生に対するリスク評価〕	(大阪千里月華殿)
4月21日	編集委員会	(ILSI JAPAN)
4月21日	科学研究企画委員会	(ILSI JAPAN)
5月8日	事務局会議	(ILSI JAPAN)
5月14日	ILSI JAPAN講演会 〔食物とがん〕	(食糧会館)
5月15日	広報委員会	(ILSI JAPAN)
5月19日	ILSI JAPAN講演会 〔毒性病理に関する新しい知見〕	(大阪ライオンズホテル)
5月20～23日	第10回実験動物の筋肉、骨組織に 関する国際シンポジウムと ILSI病理組織スライドセミナー	(奈良県新公会堂)
5月25日	ILSI JAPAN講演会 〔毒性病理に関する新しい知見〕	(学士会館)
5月27日	役員会	(ANA東京ホテル)
6月2日	バイオテクノロジーWG	(ILSI JAPAN)
6月3日	編集委員会	(ILSI JAPAN)
6月3日	油脂研究委員会	(大洋漁業会議室)
6月12日	委員長会議	(ILSI JAPAN)
6月18日	'93特別シンポジウムの打ち合わせ	(国立がんセンター会議室)
6月30日	バイオテクノロジー研究委員会	(味の素会議室)
7月2日	広報委員会	(ILSI JAPAN)
7月2日	戸上副会長(広報担当)と 広報委員会の打ち合わせ	(プチモンド会議室)
7月3日	事務局会議	(ILSI JAPAN)
7月10日	事務局会議	(ILSI JAPAN)
7月17日	事務局会議	(ILSI JAPAN)
7月20日	安全性研究委員会	(ILSI JAPAN)
7月22日	バイオテクノロジー研究委員会 正・副委員長打ち合わせ	(ILSI JAPAN)
7月23日	故小原前会長墓参	(青山墓地)
7月24日	広報委員会	(ILSI JAPAN)
7月24日	事務局会議	(ILSI JAPAN)
7月29日	編集委員会	(ILSI JAPAN)
7月29日	油脂研究委員会	(大洋漁業会議室)
7月30日	バイオテクノロジー研究委員会	(学士会館)



I L S I J A P A N 出版物

(在庫切れのものもございますので、在庫状況、値段等は事務局にお問い合わせ下さい)

\*印：在庫切れ

○ I L S I J A P A N 機関誌

(食品とライフサイエンス)

- No. 1 特集 発会にあたって、栄養専門家会議、骨代謝とミネラル \*
- No. 2 特集 最近における癌研究、食品添加物の最近の考え方 \*
- No. 3 特集 食塩の摂取について、ミネラル代謝 \*
- No. 4 特集 日本の塩の需要供給の現状 \*
- No. 5 特集 I L S I の動向
- No. 6 特集 砂糖をめぐる健康問題、I L S I 概要
- No. 7 特集 「食品添加物摂取量調査」WG報告
- No. 8 特集 「食塩」WG報告
- No. 9 特集 「骨代謝とミネラル」WG報告
- No. 10 特集 「砂糖」WG報告
- No. 11 特集 健康食品、日米の比較
- No. 12 特集 安全性評価国際シンポジウム (1)
- No. 13 特集 安全性評価国際シンポジウム (2)
- No. 14 特集 安全性評価国際シンポジウム (3)
- No. 15 特集 食用油脂成分の栄養性と安全性
- No. 16 特集 創立5周年を迎えて
- No. 17 特集 食事と健康国際シンポジウム
- No. 18 特集 食事と健康シンポジウム (1)
- No. 19 特集 食事と健康シンポジウム (2)
- No. 20 特集 動物実験の現状と問題点
- No. 21 特集 食用油脂と脳卒中虚血性心疾患
- No. 22 特集 栄養とフィットネス
- No. 23 特集 新技術利用発酵食品の基礎と社会的評価
- No. 24,25 特集 I L S I J A P A N 7周年記念フォーラム
- No. 26 特集 食品の安全、ダイエタリーファイバー、機能性食品
- No. 27 特集 イシューマネジメントとI L S I  
バイオテクノロジーに関する規制の国際動向
- No. 28 特集 食餌制限と加齢、米国における健康・栄養政策
- No. 29 特集 創立10周年記念特別号
- No. 30 特集 第1回国際会議「栄養とエイジング」

( I L S I ・ イルシー )

- No. 31 特集 新会長就任挨拶、栄養とエイジング研究の方向性  
エイジング研究とクオリティ・オブ・ライフ
- No. 32 特集 委員会活動報告

○ワーキング・グループ報告シリーズ

- No. 1 「食品添加物の摂取量調査と問題点」
- No. 2 「子供の骨折についての一考察」
- No. 3 「食生活における食塩のあり方（栄養バランスと食塩摂取）」
- No. 4 「砂糖と健康」
- No. 5 「食と健康」
- No. 6 「日本人の栄養」
- No. 7 「油脂の栄養と健康」

○国際会議講演録

- 「安全性評価国際シンポジウム講演録」
- 「バイオテクノロジー国際セミナー講演録」 \*
- 「第1回国際会議「栄養とエイジング」講演録」 (編纂中)

○ILSIライフサイエンス シリーズ

- No. 1 「毒性試験における細胞培養」 (U. モーア)
- No. 2 「ECCにおける食品法規の調和」 (G. J. ファンエシュ) \*
- No. 3 「ADI」 (R. ウォーカー)
- No. 4 「骨粗鬆症」 (B. E. C. ノールディン、A. G. ニード)
- No. 5 「食事と血漿脂質パターン」 (A. ボナノーム、S. M. グランディ)

○最新栄養学 (第5版)

○最新栄養学 (第6版)

"Present Knowledge in Nutrition, Vol.5 及び Vol.6の邦訳本が、(株)建帛社から市販。

○バイオテクノロジーと食品 (株)建帛社から市販。

○FAO/WHOレポート「バイオ食品の安全性」(株)建帛社から市販。

## I L S I 出版物

(以下の I L S I 出版物は、いずれも英文で、スプリンジャー・フェアラーク社から市販されています。購入ご希望のかたは、お手数ですが下記注文先まで直接お問い合わせ下さい)

注文先：イースタン・ブック・サービス (株) ☎ (03) 3818-0861

☎ (03) 3818-0864

### ○実験動物の臓器別病理学モノグラフ・シリーズ

"Monographs on the Pathology of Laboratory Animals"

- Cardiovascular and Musculoskeletal Systems
- Digestive System
- Endocrine System
- Eye and Ear
- Genital System
- Hemopoietic System
- Integument and Mammary Glands
- Nervous System
- Pathology of Tumours in Laboratory Animals
- Respiratory System
- Urinary System

### ○ I L S I ヒューマン・ニュートリション・レビュー・シリーズ

"ILSI Human Nutrition Reviews"

- Calcium in Human Biology
- Diet and Behavior : Multidisciplinary Approaches
- Dietary Starches and Sugars in Man: A Comparison
- Modern Lifestyles, Lower Energy Intake and Micronutrient Status
- Sucrose
- Sweetness
- Thirst
- Zinc in Human Biology

### ○ I L S I モノグラフ・シリーズ

"ILSI Monographs"

- Carcinogenicity
- Assessment of Inhalation Hazards
- Inhalation Toxicology: The Design and Interpretation of Inhalation Studies and Their Use in Risk Assessment

- Biological Effects of Dietary Restriction
- Monitoring Dietary Intakes
- Radionuclides in the Food Chain
  
- "Current Issues in Toxicology"
  - Interpretation and Extrapolation of Chemical and Biological Carcinogenicity Data to Establish Human Safety Standards / The Use of Short-Term Tests for Mutagenicity and Carcinogenicity in Chemical Hazard Evaluation
  - Interpretation and Extrapolation of Reproductive Data to Establish Human Safety Standards
  
- Nutrition Reviews誌 (月刊)
  
- "Present Knowledge in Nutrition" (第6版)
  
- Caffeine : Perspectives from Recent Research

ILSI JAPAN 及び 機関誌「ILSI・イルシー」  
認知度向上について

(株) ロッテ中央研究所  
基礎研究部 部長 丸山 孝

ILSI JAPANが発足して11年を迎えました。昨年は10周年という事で記念事業として「栄養とエイジング」について国際会議を開催いたしました。この時広報委員をおおせつかり晴海の「食品開発展」で2回にわたりパンフレットを配布し多くの企業や関心のある方々の国際会議への参加をPRしました。またILSIの活動について来場者に説明をいたしました。ILSIに対する認知度が私の予想した以上に低いことを思い知らされました。中には半導体の会社ですか(Large Scale Integrationと読み違えたらしい)とかILSI発行の書籍の陳列をみて本屋さんですかとの質問もあり困惑しました。またILSI会員会社の人のなかにも“我社はILSIに入っているのですか”との質問も多く、ILSIの認知度を高める必要性を痛感いたしました。

ILSIは健康、栄養および食品関連の安全性について国際的な視点で活動する非営利の学術団体であり、即仕事の成果と結び付かない面もありますが、今後協会を発展させて行くためには、まず社内における認知度を高めなければなりません。

実は協会発足当初、私どもの社でもILSIに対する理解が極めて低く、そこで少しでも多くの所員にILSIを知ってもらうため配布された機関誌を全員に読んでもらうことにしました。実に簡単な方法ですのでご参考までに紹介させていただきます。

まず機関誌は協会事務局から当社の常務取締役小林研究所長(ILSI理事)に10部送られてきます。このうち9部を私が預かり、管理室を通じ各研究部へ配布します。当研究所には6研究部がありその下に研究室が配置

してあります。

末端まで流れるように各部長にお願いしています。

私の部では、下記の紙片を表紙につけて各研究室の回覧としています。

回覧

基礎開発室——生物科学室——分析室——部長 (保存)

印 印 印

各研究室長は全員に目を通すように指示しています。

現在ではほとんどの所員がILSIの活動を良く理解しております。このほか本協会のワーキンググループ、講演会にも積極的に参加できるように努めています。

さて、この度ILSI機関誌の紙面がB-5版からA-4版と大きくなりましたことについて所員に感想を求めたところなかなか好評です。気に入った点を上げますと、

1. 一般雑誌のようで親しみやすい。読みやすい。
2. デザインがシンプルで上品である。
3. ILSI (イルシー) が大きくはいりILSIが強くアピールされている。
4. 内容が充実している。(特に講演要旨の内容が良い)
5. 陳列、保存に便利である。

表紙のデザインも一新されましたし、この機に機関誌をさらに有効に活用されILSIの認知度を高めて下さいますよう広報委員の一人としてこの機会に蛇足ではありますがお願い申し上げます。

## 編集後記

ILSI JAPAN (日本国際生命科学協会) の機関誌「食品とライフサイエンス」が31号から「ILSI イルシー」に変わり6月に新しい装いで会員各位や読者の方々に配布されました。幸い、皆様からのご意見によれば概ね好評のようです。編集委員会としても会員会社の各位および読者の方々からのご意見を積極的にお寄せ頂き、今後の編集に活かして参りたいと思います。本号には(株)ロッテ 丸山氏のご意見を載せてあります。今後も主要なご意見は本誌に掲載して参ります。

会員会社の内部でさえILSI JAPANの認知度が低く活動について十分に知られていないとの声があります。本誌がILSIの認知度を少しでも高めるためのお役に立つようにと願っております。そのための試みとして今号から主要論文等にはいわゆる Executive Summary (抄録) をつけることにしました。これにより多忙な方や理科系統の専門でない方にもILSI JAPANの活動をよりよく理解して頂ければ幸いです。

本号の巻頭言を小西副会長にお願いしましたところ「実験動物における各種臓器の国際シンポジウムと病理組織スライドセミナーの10年間の実績と現況および将来について」の長文のご寄稿を頂きました。ILSI JAPANの重要な活動の一つとして会員各位のご理解を頂きたいと思っております。

従来から「食品とライフサイエンス」には「国際標準逐次刊行物番号 (ISSN)」がつけられておりました (ISSN 0287-4768) が、この程タイトルを新しくした機関誌「ILSI イルシー」についても国立国会図書館に申請し、ISSN 0918-4546の割当を受けましたので今号から表紙の右上に印刷します。

皆様のご協力により一層の充実を計って参りたいと思っております。

編集委員会 委員長  
青木 真一郎

日本国際生命科学協会会員名簿 (アイウエオ順)

[1992.4.1現在]

会 長	角田 俊直	味の素 (株) 常任顧問 104 東京都中央区京橋 1-15-1	03-5250-8304
副会長	栗飯原景昭	大妻女子大学教授 102 東京都千代田区三番町 1 2	03-5275-6074
〃	木村 修一	東北大学農学部長 980 宮城県仙台市青葉区堤通雨宮町 1-1	022-272-4321
〃	小西 陽一	奈良県立医科大学教授 634 奈良県橿原市四条町 8 4 0	07442-2-3051
〃	十河 幸夫	雪印乳業 (株) 専務取締役関西本部長 532 大阪府大阪市淀川区宮原 5-2-3	06-397-2014
〃	戸上 貴司	日本コカ・コーラ (株) 取締役上級副社長 150 東京都渋谷区渋谷 4-6-3	03-5466-8287
〃	山本 康	キリンビール (株) 取締役副社長 150 東京都渋谷区神宮前 6-26-1	03-5485-6112
本部理事	林 裕造	国立衛生試験所安全性生物試験研究センター長 158 世田谷区上用賀 1-18-1	03-3700-1141
〃	杉田 芳久	味の素 (株) 理事 104 東京都中央区京橋 1-15-1	03-5250-8184
監 事	印藤 元一	高砂香料工業 (株) 顧問 108 東京都港区高輪 3-19-22	03-3442-1211
〃	難波 靖尚	前 (財) 食品産業センター理事 189 東京都東村山市萩山町 4-13-7	0423-93-1050
顧 問	森実 孝郎	(財) 食品産業センター理事長 153 東京都目黒区上目黒 3-6-18 TYビル	03-3716-2101
〃	石田 朗	前 (財) 食品産業センター理事長 108 東京都港区高輪 1-5-33-514	03-3445-4399
理 事	秋山 孝	長谷川香料 (株) 理事 103 東京都中央区日本橋本町 4-4-14	03-3241-1151
〃	荒木 一晴	森永乳業 (株) 研究情報センター食品総合研究所 分析センター室長 228 神奈川県座間市東原 5-1-83	0462-52-3080

理事	石川 宏	(株)ニチレイ取締役総合研究所所長 189 東京都東村山市久米川町1-52-14	0423-91-1100
〃	石田 幸久	武田薬品工業(株)ヘルスケア事業部 商品企画部長 103 東京都中央区日本橋2-12-10	03-3278-2450
〃	伊藤 博	田辺製薬(株)研究統括センター所長 532 大阪府大阪市淀川区加島3-16-89	06-300-2746
〃	入江 義人	三栄化学工業(株)理事学術部マネージャー 561 大阪府豊中市三和町1-1-11	06-333-0521
〃	岡田 実	日本食品化工(株)研究所所長 417 静岡県富士市田島30	0545-53-5964
〃	岡本 悠紀	小川香料(株)取締役フレーバー開発研究所所長 115 東京都北区赤羽西6-32-9	03-3900-0155
〃	落合 董	昭和産業(株)製油技師長 101 東京都千代田区内神田2-2-1	03-3293-7754
〃	片岡 達	昭和電工(株)理事品質保証部長 105 東京都港区芝大門1-13-9	03-5470-3591
〃	金井 晃	東ソー(株)東京研究センター生物工学研究所所長 252 神奈川県綾瀬市早川2743-1	0467-77-2211
〃	河瀬 伸行	三菱化成食品(株)生産企画部長 104 東京都中央区銀座5-13-3いちかわビル8F	03-3542-6490
〃	神田 豊輝	ライオン(株)食品研究所所長 130 東京都墨田区本所1-3-7	03-3621-6461
〃	神田 洋	日清製油(株)取締役研究所所長 221 神奈川県横浜市神奈川区千若町1-3	045-461-0181
〃	郷木 達雄	(株)ヤクルト本社 中央研究所研究管理部副主席 研究員 186 東京都国立市谷保1796	0425-75-8960
〃	向後新四郎	白鳥製薬(株)常務取締役 技術部長 260 千葉県千葉市美浜区新港54	043-242-7631
〃	河野 文雄	三共(株)特品開発部長 104 東京都中央区銀座2-7-12	03-3562-0411
〃	小林 勝利	(株)ロッテ中央研究所常務取締役所長 336 埼玉県浦和市沼影3-1-1	0488-61-1551
〃	小林 茂夫	大和製罐(株)常務取締役 103 東京都中央区日本橋2-1-10	03-3272-0561



理事	齋藤 成正	キッコーマン (株) 研究本部研究推進室長 278 千葉県野田市野田399	0471-23-5515
〃	笹山 堅	ファイザー (株) 代表取締役社長 105 東京都港区西新橋1-6-21	03-3503-0441
〃	柴田 征一	大日本製薬 (株) 食品化成品部市場開発部部长 541 大阪府大阪市中央区道修町2-6-8	06-203-5319
〃	神 伸明	日本ケロッグ (株) 代表取締役社長 163-05 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル27階	03-3344-0814
〃	新保喜久雄	(株) ホーネンコーポレーション食品開発研究所長 424 静岡県清水市新港町2	0543-54-1584
〃	末木 一夫	日本ロシユ (株) 化学品本部 ヒューマンニュートリション部 学術課長 105 東京都港区新橋6-17-19新御成門ビル	03-5470-1702
〃	須ヶ間 弘	三井東圧化学 (株) ライフサイエンス開発部部长 100 東京都千代田区霞が関3-2-5	03-3592-4111
〃	杉浦 滋彦	理工協産 (株) 代表取締役社長 104 東京都中央区八重洲2-7-2	03-3281-8820
〃	杉澤 公	ハウス食品工業 (株) 常務取締役 577 大阪府東大阪市御厨栄町1-5-7	06-788-1231
〃	鈴木 堯之	エーザイ (株) 食品化学事業部部长 112-88 東京都文京区小石川5-5-5	03-3817-3781
〃	曾根 博	理研ビタミン (株) 代表取締役社長 101 東京都千代田区三崎町2-9-18 (TDCビル)	03-5275-5111
〃	高木 紀子	(株) アルソア総合研究所 次長 150 東京都渋谷区渋谷3-26-20	03-3499-3681
〃	高木ヤスオ	クノール食品 (株) 常務取締役商品開発研究所長 213 神奈川県川崎市高津区下野毛2-12-1	044-811-3111
〃	田中 健次	日本ペプシコ社 技術部長 107 東京都港区赤坂1-9-20第16興和ビル	03-3584-7343
〃	堤 賢太郎	リノール油脂 (株) 名古屋工場研究開発部部长 455 愛知県名古屋市港区潮見町37-15	052-611-4114
〃	寺西 弘	協和醗酵工業 (株) 取締役 酒類食品企画開発センター長 100 東京都千代田区大手町1-6-1大手町ビル	03-3282-0078

理事	戸塚 陽信	糖質事業開発協議会 運営委員長 100 東京都千代田区大手町1-2-1 三井物産(株) 糖質醗酵部開発業務グループ気付	03-3285-5858
◇	長尾 精一	日清製粉(株) 理事 食品研究所長 354 埼玉県入間郡大井町鶴ヶ岡5-3-1	0492-67-3910
◇	成富 正温	大正製薬(株) 取締役企画部長 171 東京都豊島区高田3-24-1	03-3985-1111
◇	新村 正純	味の素ゼネラルフーズ(株) 取締役研究所長 513 三重県鈴鹿市南玉垣町6410	0593-82-3186
◇	西原 昭雄	旭電化工業(株) 研究所研究企画部長 116 東京都荒川区東尾久7-2-35	03-3892-2110
◇	野中 道夫	大洋漁業(株) 理事中央研究所長 300-42 茨城県つくば市和台16-2	0298-64-6700
◇	萩原 耕作	仙波糖化工業(株) 取締役会長 321-43 栃木県真岡市並木町2-1-10	02858-2-2171
◇	林 利樹	山之内製薬(株) 健康科学研究所長 103 東京都中央区日本橋本町2-3-11	03-3244-3384
◇	秦 邦男	十條製紙(株) 常務取締役 研究開発本部長 100 東京都千代田区有楽町1-12-1	03-3211-7311
◇	早川 和雄	鐘淵化学工業(株) 取締役食品事業部長 530 大阪府大阪市北区中之島3-2-4	06-226-5240
◇	原 健	帝人(株) 医薬企画部長 100 東京都千代田区内幸町2-1-1	03-3506-4529
◇	東 直樹	サントリー(株) 研究企画部長 102 東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニガーデンコート9F	03-5276-5071
◇	平原 恒男	カルピス食品工業(株) 常務取締役 150 東京都渋谷区恵比寿南2-4-1	03-3713-2151
◇	藤井 高任	ネスル日本(株) 学術部長 106 東京都港区麻布台2-4-5	03-3432-8269
◇	藤原 和彦	日本リーバB.V.インターナショナル テクニカル リエゾン マネージャー 150 東京都渋谷区渋谷2-22-3渋谷東口ビル	03-3499-6061
◇	宮田 保彦	三国コカ・コーラ ボトリング(株) 中央研究所長 363 埼玉県桶川市大字加納180	048-774-8811

理事	森田 雄平	不二製油（株）つくば研究開発センター長 300-24 茨城県筑波郡谷和原村絹の台4-3	0297-52-6321
〃	柳瀬 仁茂	キューピー（株）研究所副所長 183 東京都府中市住吉町5-13-1	0423-61-5987
〃	山内 久実	（株）ボゾリサーチセンター取締役社長 156 東京都世田谷区羽根木1-3-11ボゾリサーチビル	03-3327-2111
〃	山崎 晶男	山崎製パン（株）常務取締役 101 東京都千代田区岩本町3-2-4	03-3864-3011
〃	山崎 義文	太陽化学（株）代表取締役副社長 510 三重県四日市市赤堀新町9-5	0593-52-2555
〃	山本 良郎	明治乳業（株）取締役研究本部中央研究所長 189 東京都東村山市栄町1-21-3	0423-91-2955
〃	吉川 宏	三菱商事（株）食品開発部ヘルスファーステムリーダー 100 東京都千代田区丸の内2-6-3	03-3210-6415
〃	渡辺 猛	サンスター（株）常務取締役 569 大阪府高槻市朝日町3-1	0726-82-7970
事務局長	桐村 二郎	日本国際生命科学協会	03-3318-9663
事務局次長	福富 文武	日本コカ・コーラ（株）学術調査マネージャー	03-5466-8141
事務局次長	麓 大三	日本国際生命科学協会	03-3318-9663
事務局員	池畑 敏江	日本国際生命科学協会	03-3318-9663
〃	斎藤 恵里	日本国際生命科学協会	03-3318-9663
〃	大沢満里子	日本国際生命科学協会	03-3318-9663

# ILSI JAPAN

## ILSI No.32

Life Science & Quality of Life

1992年9月 印刷発行

日本国際生命科学協会 (ILSI Japan)

会長 角田俊直

〒166 東京都杉並区梅里2-9-11-403

TEL. 03-3318-9663

FAX. 03-3318-9554

編集：日本国際生命科学協会編集委員会

(無断複製・転載を禁じます)